

佐賀大学大学院学校教育学研究科（教職大学院） 第4期修了生追跡調査結果の概要

佐賀大学大学院学校教育学研究科 専任教員一同

代表執筆者： 荻野 亮吾（教育経営探究コース） ・ 井邑 智哉（子ども支援探究コース）
米田 重和（授業実践探究コース） ・ 平田 淳（教育経営探究コース）

授業実践探究コース： 岡 陽子 ・ 後藤 大二郎 ・ 堤 公一 ・ 森 泰樹

子ども支援探究コース： 小松原 修 ・ 下田 芳幸 ・ 中尾 恵子 ・ 中島 俊思

教育経営探究コース： 中西 美香 ・ 松尾 敏実

An Overview of the Results of the Follow-up Survey for the Fourth Graduates of the Graduate School of Teacher Education of Saga University

The Faculty Members of the Graduate School of Teacher Education of Saga University

Representative Authors: Ryogo OGINO (Educational Administration Course)

Tomoya IMURA (Children Support Course)

Shigekazu KOMEDA (Instructional Practice Course)

Jun HIRATA (Educational Administration Course)

Instructional Practice Course: Yoko OKA, Daijiro GOTO, Koichi TSUTSUMI, Yasuki MORI

Children Support Course: Osamu KOMATSUBARA, Yoshiyuki SHIMODA, Keiko NAKAO,
Shunji NAKAJIMA

Educational Administration Course: Mika NAKANISHI, Toshimi MATSUO

1. 本調査の背景・目的・方法

(1) 調査の背景と目的

佐賀大学大学院学校教育学研究科（教職大学院，以下「本大学院」）は2016年4月の発足以来，今年度で6年目を迎え，2022年3月には第5期（現在の修士2年生）の修了生を送り出すことになる。つまり，ここ1-2年が本大学院にとって「5年」という一つの区切りということになっている。本誌

前号掲載の「第3期修了生追跡調査結果の概要」¹（以下「昨年度調査報告書」）では、冒頭でこうした時期的特性に触れた上で、今後は本大学院の研究・教育活動を省察し、今後の改善のための素材を得るための効果検証プロジェクトを本大学院所属教員の共同研究として実施していく計画であることや、昨年度調査は翌年度（つまり今年度）以降の本格的調査に向けての予備調査として位置付けられることなどについて言及した。

他方で、昨年度調査報告書末尾では、昨年度実施した調査の課題として、①調査対象と質問項目の整合性の問題（現職教員院生（以下「現職」）とストレートマスター（以下「ストマス」）に対して同じ調査票を用いたこと）、②調査方法上の課題（量的調査と併せてインタビューなど質的調査を併せて行い、より深い考察を行っていくこと）、③分析結果を本大学院の統一性と各コースの独自性のバランスの中でどのように活かしていくか、④データ収集方法に内在するデータの信憑性・妥当性の問題（高い回収率と回答者の匿名性の両立）、の4点を指摘した。このうち③は今後の本大学院の運営、特に授業や実習の具体的改善方策に関わることであり、その見直しには相応の手間暇をかけなければならないし、調査方法に直接関わる事項ではないため、今年度調査の方法に影響を及ぼすものではない。他方で、①②④は調査方法そのものに関する課題であり、次回（つまり今回）調査をデザインする際に十分検討して反映させなければならない、という趣旨からの指摘であった。これらのうち②に関しては、ミックスメソッドにおける質的調査の位置づけとしては様々考えられるが、本調査の目的に鑑みると、まずは量的調査で一般的な傾向を析出したうえで、それを深掘りするための手段として用いるのが適切であろうと思われる。だとすればまずは昨年度も実施したアンケート調査の課題をクリアすることが必要であり、ミックスメソッドの採用による研究の深化については、その後に細かい部分まで検討するのが妥当であろうと判断した。それは、昨年度調査報告書で言及した直近の修了生対象の調査から全修了生を対象とする調査への研究の拡張に関しても、同様のことが言えるだろう。

ゆえに今年度調査においては、上述した「本大学院の研究・教育活動を省察し、今後の改善のための素材を得る」という調査実施の主目的に加えて、昨年度報告書で指摘した課題4点のうち、特に①と④について改善を試みることによってデータの信憑性や妥当性を高めるという調査方法に特化した目的も付随的に設定されることになる。その両方の目的を達成するためには、昨年度調査同様直近の修了生、つまり第4期生を対象を限定した形でアンケート調査を実施することが適当であろうという結論になった。①と④について具体的にどのような改善策を立てたかについては、後述する。

なお、以下では、授業実践探究コースを「授業実践」、子ども支援探究コースを「子ども支援」、教育経営探究コースを「教育経営」と略すことにする。

(2) 調査の対象

本調査の対象は、2021年3月に本大学院を修了した20名の第4期修了生と、それぞれの現任校の管理職20名である。大学院生は、現職10名とストマスの院生10名で構成される（以下では、両者をあわせて「修了生」とする）。

本調査の対象となった第4期修了生の現在の所属機関の種類及び職制と人数は次の通りである。

○ 現職

¹ 次のURLからダウンロードできる。佐賀大学大学院学校教育学研究科専任教員一同「佐賀大学大学院学校教育学研究科（教職大学院）第3期修了生追跡調査結果の概要」『佐賀大学大学院学校教育学研究科研究紀要』5, 525-565. URL : <http://doi.org/10.34551/00022990>

- ・ 小学校教諭 3名
- ・ 中学校教諭 4名
- ・ 高等学校教諭 3名
- ストマス
 - ・ 小学校教諭 2名
 - ・ 中学校教諭 5名
 - ・ 中学校講師 1名
 - ・ 高等学校教諭 1名
 - ・ 特別支援学校教諭 1名

また、第4期修了生は、現在全員が学校に勤務しており、所属先の上司の役職はすべて校長である。

(3) データ収集と分析の方法

本調査におけるデータ収集は、昨年度調査をベースにしつつ、調査デザインの策定から質問紙の作成・配信・回答の回収集計結果の作成及び本報告書の執筆まですべて、本報告書の代表執筆者である4名（各コース代表＋専攻長）から構成される「佐賀大学教職大学院効果検証プロジェクトチーム」（以下「PT」）を中心として、適宜所属教員の協力を得つつ、行った。

質問紙調査は、選択肢回答（5件法）と自由記述式回答を併用して行った。質問紙調査の設計に関しては、昨年度調査で使用した質問紙をベースとして、2021年9月から10月にかけて修了生と管理職それぞれの調査票について、PTの各コース代表が中心になり、共通項目を作成した。この上で、各コース独自の項目の検討を行い、管理職用の調査票を現職用とストマス用1つずつ計2種類、修了生用の調査票を「授業実践」・「子ども支援」で現職用・ストマス用2種類ずつ、「教育経営」で現職用1種類（「教育経営」にストマスは所属していないため）を作成した。末尾に依頼状及び調査票を掲載しているが（資料1～資料9）、調査票については、Google Formsで回答を依頼したため、本報告に合わせて、Excel形式にしたものを掲載した。なお、現職用とストマス用で異なる質問項目を準備したのは、上述した昨年度調査からの反省点を活かした点である。

調査の依頼については、修了生とその管理職それぞれ20名の連絡先（E-Mail）を事前に把握した上で、2021年10月28日（木）にE-Mailで一斉に依頼書と調査票（URL）を送付した（資料1～資料9）。提出の締め切りは11月19日（金）とし、回答した際に集計担当の各コースの教員に連絡するよう依頼した。締め切りの1週間前に、連絡がない調査対象者に対して再度依頼を行った。最終的に、調査開始から1か月後の11月25日（木）に対象者全ての調査票を回収することができた。回収率は、修了生・管理職ともに100%（20名中20名）であり、全ての調査票が有効であった。なお、調査にあたっては、事前に佐賀県教育委員会に趣旨を説明したうえで、承認を得て実施した。

分析については、回答者の匿名性を保つため、担当者（荻野・井邑）が、単純集計やクロス集計、自由記述の集計を一括して行った。この分析結果を各コースの教員に共有し、コースの担当者（授業実践：米田、子ども支援：井邑、教育経営：平田・荻野）がコースごとに気づきを取りまとめた。この担当4名が中心になって、本稿へと集約した。

2. 管理職調査の結果

(1) 大学院で学んだ成果の評価

① ストマスに対する評価

まず、教職大学院で学んだ成果について、ストマスの勤務する学校管理職に尋ねた結果を、図 2-1 に示した（回答者は 10 名）。各項目について、「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の 5 件法で尋ねた。

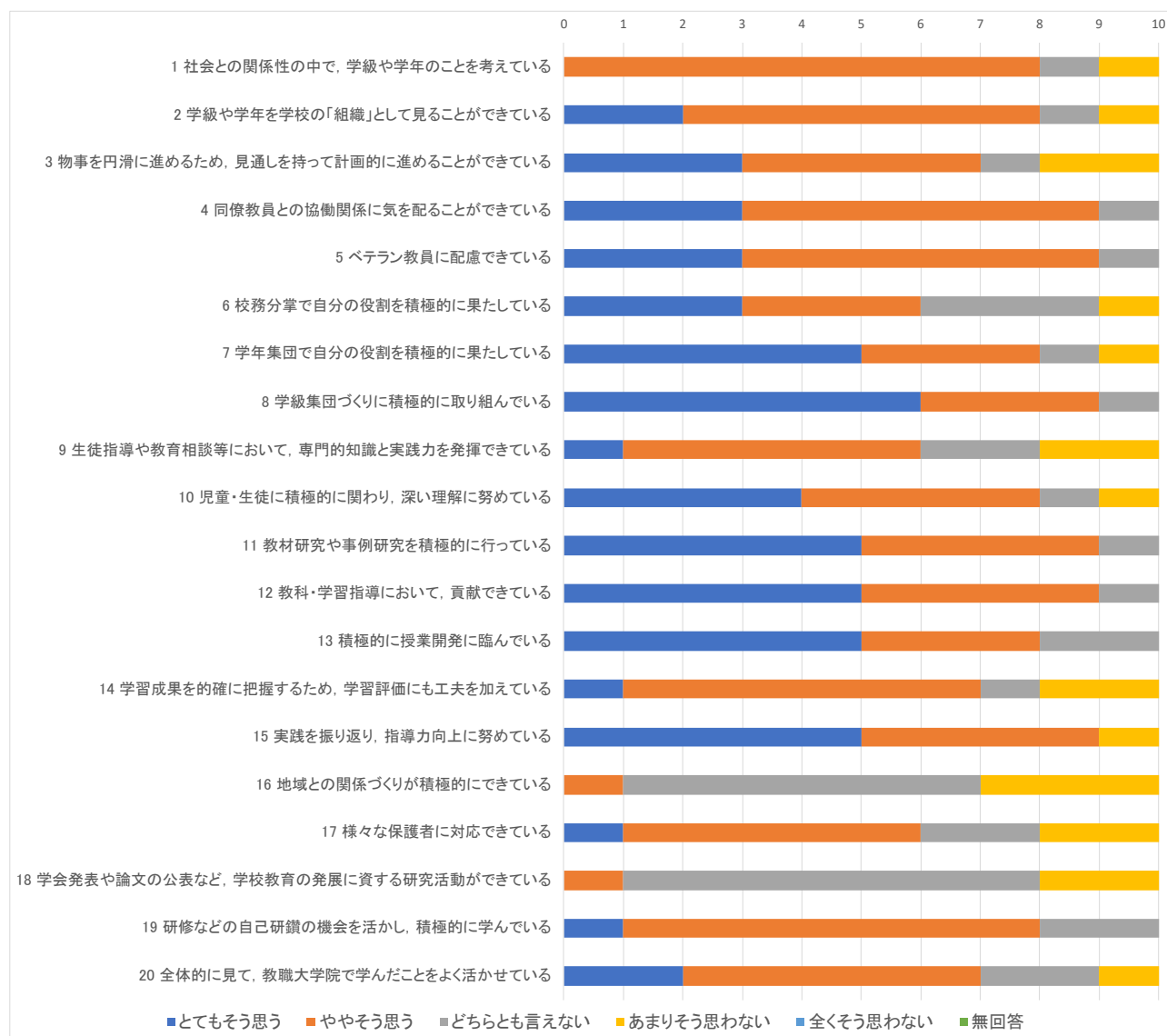


図 2-1 ストマスが教職大学院で学んだ成果に関する管理職の評価（N=10）

肯定の割合が高い項目を順に見ていくと、「8 学級集団づくりに積極的に取り組んでいる」、「11 教材研究や事例研究を積極的に行っている」、「12 教科・学習指導において、貢献できている」、「15 実践を振り返り、指導力向上に努めている」が 9 割となっていた。「4 同僚教員との協働関係に気を配ることができている」、「5 ベテラン教員に配慮できている」も、「とてもそう思う」の割合は少し低いが、同じく、肯定の割合は 9 割となっていた。これに続いて、「1 社会との関係性の中で、学級や学年のことを考えている」、「2 学級や学年を学校の『組織』として見る事ができている」、「7 学年集団で自分の役割を積極的に果たしている」、「10 児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている」、「13 積極

的に授業開発に臨んでいる」、「19 研修などの自己研鑽の機会を活かし、積極的に学んでいる」といった項目においても、肯定の割合が8割となっていた。

その他の項目についても概ね評価は高いが、「16 地域との関係づくりが積極的にできている」、「18 学会発表や論文の公表など、学校教育の発展に資する研究活動ができている」は、肯定の割合が1割に留まった。これについては、大学院を修了して初めて教職に就くことを踏まえれば、地域との関係づくりや研修で自己研鑽するということまでの余裕がないのではないかと考えられる。しかしながら、教師として必要なことであるので、教職経験を積み重ねる中で、そういったことができるようになってもらいたい。

② 現職に対する評価

次に、教職大学院で学んだ成果がどの点に認められるかについて、現職の勤務する学校管理職に尋ねた結果を、図2-2に示した（回答者は10名）。

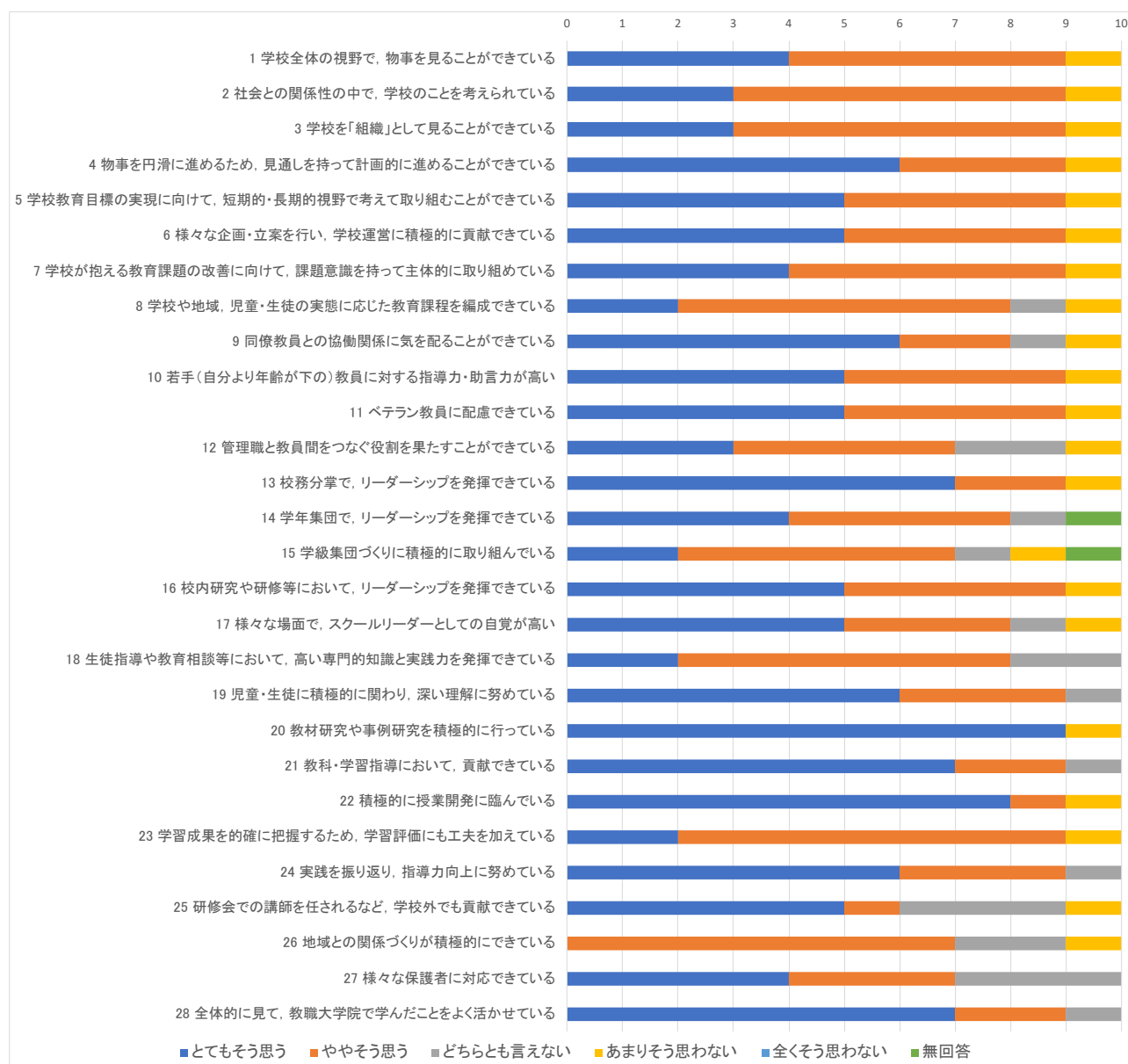


図2-2 現職が教職大学院で学んだ成果に関する管理職の評価（N=10）

各項目について、「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の5件法で尋ねた。

多くの項目で肯定の割合が高かったため、ここでは、積極的な肯定を示す「とてもそう思う」が多かった項目を取り上げる。最も「とてもそう思う」が多かった項目は、「20 教材研究や事例研究を積極的に行っている」であった（「とてもそう思う」が9割）。これに続いて、「13 校務分掌で、リーダーシップを発揮できている」、「21 教科・学習指導において、貢献できている」、「28 全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている」（同じく、7割）、「4 物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができている」、「9 同僚教員との協働関係に気を配ることができている」、「19 児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている」、「24 実践を振り返り、指導力向上に努めている」（同じく6割）といった項目が挙げられる。

同じ項目について、肯定の割合（「とてもそう思う」と「ややそう思う」の合計）を示したものが、表 2-1 である。この表には、コースごとの割合も合わせて示した。コースごとの回答者については、「授業実践」が2名、「子ども支援」が3名、「教育経営」が5名であり、以降の分析でも同様である。表中の黄色の網掛けは肯定が8割を超えるもの、橙色の網掛けは6割以上8割未満のものを示す。

表 2-1 現職が教職大学院で学んだ成果に関する管理職の評価（全体、コース別）

番号	項目	肯定の割合 (全体)	授業実践	子ども支援	教育経営
1	学校全体の視野で、物事を見ることができている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
2	社会との関係性の中で、学校のことを考えられている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
3	学校を「組織」として見ることができている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
4	物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
5	学校教育目標の実現に向けて、短期的・長期的視野で考えて取り組むことができている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
6	様々な企画・立案を行い、学校運営に積極的に貢献できている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
7	学校が抱える教育課題の改善に向けて、課題意識を持って主体的に取り組んでいる	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
8	学校や地域、児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成できている	80.0%	50.0%	66.7%	100.0%
9	同僚教員との協働関係に気を配ることができている	80.0%	100.0%	33.3%	100.0%
10	若手（自分より年齢が下の）教員に対する指導力・助言力が高い	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
11	ベテラン教員に配慮できている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
12	管理職と教員間をつなぐ役割を果たすことができている	70.0%	50.0%	33.3%	100.0%
13	校務分掌で、リーダーシップを発揮できている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
14	学年集団で、リーダーシップを発揮できている	80.0%	100.0%	66.7%	80.0%
15	学級集団づくりに積極的に取り組んでいる	70.0%	100.0%	33.3%	80.0%
16	校内研究や研修等において、リーダーシップを発揮できている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
17	様々な場面で、スクールリーダーとしての自覚が高い	80.0%	100.0%	33.3%	100.0%
18	生徒指導や教育相談等において、高い専門的知識と実践力を発揮できている	80.0%	100.0%	33.3%	100.0%
19	児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
20	教材研究や事例研究を積極的に行っている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
21	教科・学習指導において、貢献できている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
22	積極的に授業開発に臨んでいる	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
23	学習成果を的確に把握するため、学習評価にも工夫を加えている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
24	実践を振り返り、指導力向上に努めている	90.0%	100.0%	100.0%	80.0%
25	研修会での講師を任されるなど、学校外でも貢献できている	60.0%	100.0%	33.3%	60.0%
26	地域との関係づくりが積極的にできている	70.0%	50.0%	33.3%	100.0%
27	様々な保護者に対応できている	70.0%	100.0%	33.3%	80.0%
28	全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%

まず全体的な傾向を昨年度調査と比較してみると、昨年度調査では、肯定の割合が100%は0項目、

80%が1項目、70%台が5項目、60%台が6項目、50%台が7項目、40%台が5項目、30%台1項目、20%台が2項目、10%台が1項目であったのに対し、今年度調査では100%は昨年度同様0項目であったが、90%が18項目、80%が5項目、70%が4項目、60%が1項目と、肯定的な割合が高い。また、今年度調査で唯一の60%であった「25 研修会での講師を任されるなど、学校外でも貢献できている」も、前年度調査では25%であったことと比較すると、肯定的な割合が高くなっている。

また、コースごとに見ても、多くの項目で肯定の割合が高いことがうかがえる。そこで、肯定の割合がやや低いものを取り上げる。「授業実践」では、「8 学校や地域、児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成できている」、「12 管理職と教員間をつなぐ役割を果たすことができている」、「26 地域との関係づくりが積極的にできている」の項目で肯定の割合が低くなっていた。ただし、現職2名のうち1名は大学院修了後、異動している。割合が低かった質問項目は、異動してすぐに新しい環境で力を発揮するのが難しいものとなっている。そのため、評価が低くなったと推察される。

また、「子ども支援」では、他のコースに比べて全体的に肯定的な回答の割合が低い傾向にある。特に、「9 同僚教員との協働関係に気を配ることができている」、「12 管理職と教員間をつなぐ役割を果たすことができている」、「15 学級集団づくりに積極的に取り組んでいる」、「17 様々な場面で、スクールリーダーとしての自覚が高い」、「18 生徒指導や教育相談等において、高い専門的知識と実践力を発揮できている」、「25 研修会での講師を任されるなど、学校外でも貢献できている」、「26 地域との関係づくりが積極的にできている」、「27 様々な保護者に対応できている」の肯定の割合が、低くなっていた。

「子ども支援」の現職3名中2名が大学院修了後、異動している。異動先の学校の様子（子どもやその保護者及び職員）が把握できないままの勤務であり、大学院での研修内容がそのまま異動先の学校での実践面に活用させづらい状況が発生していると考えられる。

さらに、「教育経営」では、肯定の割合が6割を下回る項目はなかったが、内訳としては28の質問項目のうち60%となっているのが1項目、80%が4項目、残りの22項目は100%である。昨年度調査の同じ表と比較してみると、20%が2項目、40%が1項目、60%が4項目、80%が8項目、100%が13項目と、今年と比べるとかなり回答が分散していたことがわかる。そして、昨年度数値が低かった項目について、20%だった26と27が今年は100%と80%に、40%だった25が60%に、60%だった11・14・15・19が100%・80%・80%・100%になり、軒並み肯定の割合が高くなっている。今回唯一60%だった質問項目25も、昨年度の40%と比べると、肯定の割合が高くなっており、全体の上昇傾向と同様である。こうした傾向が見られた背景としては、昨年度の3期生修了生は5名中2名が修了後教育行政勤務となり、職務上児童・生徒と直接関わる機会が少なかったことや、学級集団・学年集団に所属していなかったために質問項目によっては数値が低くなった反面、4期生は5名全員が修了後も学校勤務を継続したことから、肯定の割合が高くなったとも考えられる。なお、今年度の現職用調査項目は、昨年度現職・ストマス双方に関して用いた調査項目と基本的には同じものであり、若干の表現の修正を行っているものもあるが、質問の趣旨は変更していない。

③ 留意事項

現在の管理職による修了生評価を解釈する際に留意すべき事項は、昨年度の調査報告において言及したこととほぼ同様である。以下、若干の加筆（今年度調査にのみ該当する事項）と共に再掲する（下線部分加筆）²。

² 佐賀大学大学院学校教育学研究科専任教員一同「佐賀大学大学院学校教育学研究科（教職大学院）第3期修了生追跡調査結果の概要」前掲。

まず、上で示した評価は、学校管理職の目線での評価であるので、修了生自身の評価とは異なることに留意が必要である。管理職の評価が低いように見える項目も、職制等によって実際に取り組む機会が少ないことが理由となっている場合があるだろう。例えば、「8 学校や地域、児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成するようになった」に関する評価が低いように見えるのは、修了生（特にストマス）の現在の職制では編成に関わる機会が少ないことに起因していると考えられる。これとは別に、「25 研修会での講師を任されるなど、学校外でも貢献できるようになった」に関する割合が低いように見えるのも、修了生を講師として活用するための情報が関係各所に届いていない可能性がある。佐賀県教育センターと連携する等して、修了生が大学院や実習の中で得た経験や知識の活用方策について工夫をすることも必要ではないかと考えられる。

これ以外に、「26 地域との関係づくりに積極的になった」や、「27 様々な保護者に対応する能力が高まった」の地域や保護者との関係づくりの評価が低いことについては、学校種による差があると考えられる。例えば、生活科や総合的な学習の時間、各種の体験活動等で地域と連携する機会が多い小学校では高い割合を示すとしても、教育内容の専門性が高い高校では連携の割合は低くなり、その結果評価も低くなるといったことが考えられる。また、担任をしなければ地域や保護者との関係づくりの機会が少なくなることも考慮しておく必要がある。なお、この二つの項目について「教育経営」の評価が高いのは、地域との連携を中心にした対外経営を、2年間の研究テーマにした院生が多かったことに起因する可能性がある。

また全体的に、現職に比べるとストマスの評価が低くなっているように見えるが、期待される役割の大きさや、年齢や経験年数等を考慮すれば、ある意味で当然の結果であると言える。この中でも、先に挙げたように、「9 同僚教員との協働関係に気を配れるようになった」、「15 学級集団づくりに積極的に取り組むようになった」、「19 児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めるようになった」、「24 実践を振り返り、指導力向上に努めるようになった」については、肯定的な評価が7割を超えている。修了生が期待される役割に応じて、各学校で着実な取り組みを進めていることがうかがえる結果となっている。（532 頁）

(2) 修了生に期待する役割について

① ストマスに期待する役割

今後修了生に期待する役割について、図 2-3 に、ストマスの修了生が勤務する管理職に対する調査結果をまとめた。各項目について、「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の5件法で尋ねた。

回答結果を見ると、「2 生徒指導において積極的に関わること」、「3 授業改善に向けて積極的に関わること」、「4 学習評価において積極的に関わること」の3項目は、肯定の割合が100%となっていた。「1 教員間の協働体制の強化において積極的に関わること」も肯定が9割、「6 学校と保護者との関係づくりに積極的に関わること」も肯定が8割となっており、総じて期待が高くなっていた。

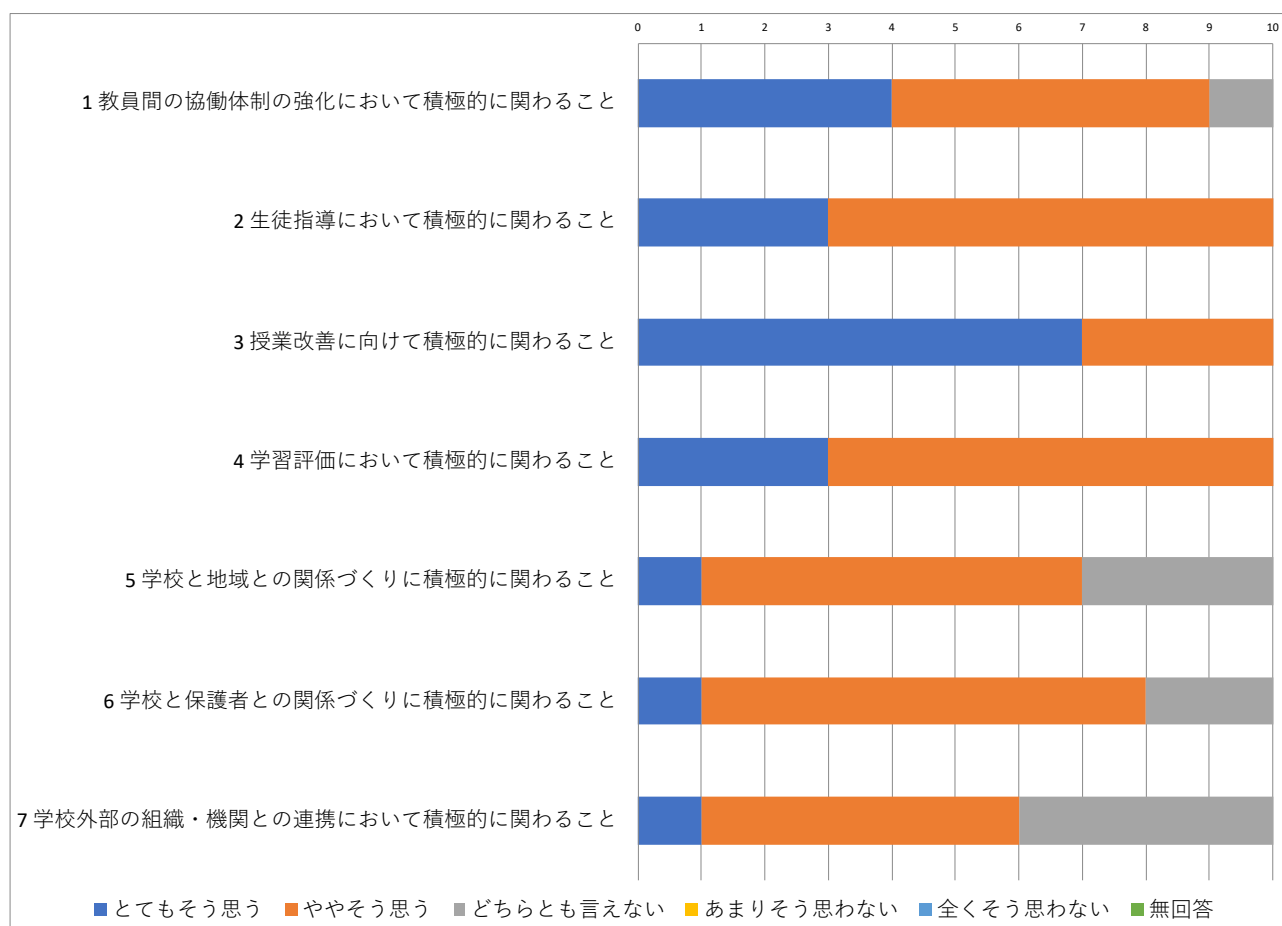


図 2-3 管理職がストマスの修了生に期待する役割 (N=10)

同じ項目について、肯定の割合（「とてもそう思う」と「ややそう思う」の合計）を示したものが、表 2-2 である。この表には、コースごとの割合も示している。

表 2-2 管理職がストマスの修了生に期待する役割（全体、コース別）

番号	項目	肯定の割合 (全体)	授業実践	子ども支援
1	教員間の協働体制の強化において積極的に関わること	90.0%	100.0%	0.0%
2	生徒指導において積極的に関わること	100.0%	100.0%	100.0%
3	授業改善に向けて積極的に関わること	100.0%	100.0%	100.0%
4	学習評価において積極的に関わること	100.0%	100.0%	100.0%
5	学校と地域との関係づくりに積極的に関わること	70.0%	66.7%	100.0%
6	学校と保護者との関係づくりに積極的に関わること	80.0%	77.8%	100.0%
7	学校外部の組織・機関との連携において積極的に関わること	60.0%	66.7%	0.0%

どちらのコースの修了生についても期待が高い項目として、「2 生徒指導において積極的に関わるこ

と」、「3 授業改善に向けて積極的に関わること」、「4 学習評価において積極的に関わること」、「5 学校と地域との関係づくりに積極的に関わること」、「6 学校と保護者との関係づくりに積極的に関わること」が挙げられる。「1 教員間の協働体制の強化において積極的に関わること」と「7 学校外部の組織・機関との連携において積極的に関わること」の項目については、修了コースによって期待が異なった。

② 現職に期待する役割

次に、今後修了生に期待する役割について、図 2-4 に、現職の修了生が勤務する管理職に対する調査結果をまとめた。各項目について、「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の5件法で尋ねた結果である。

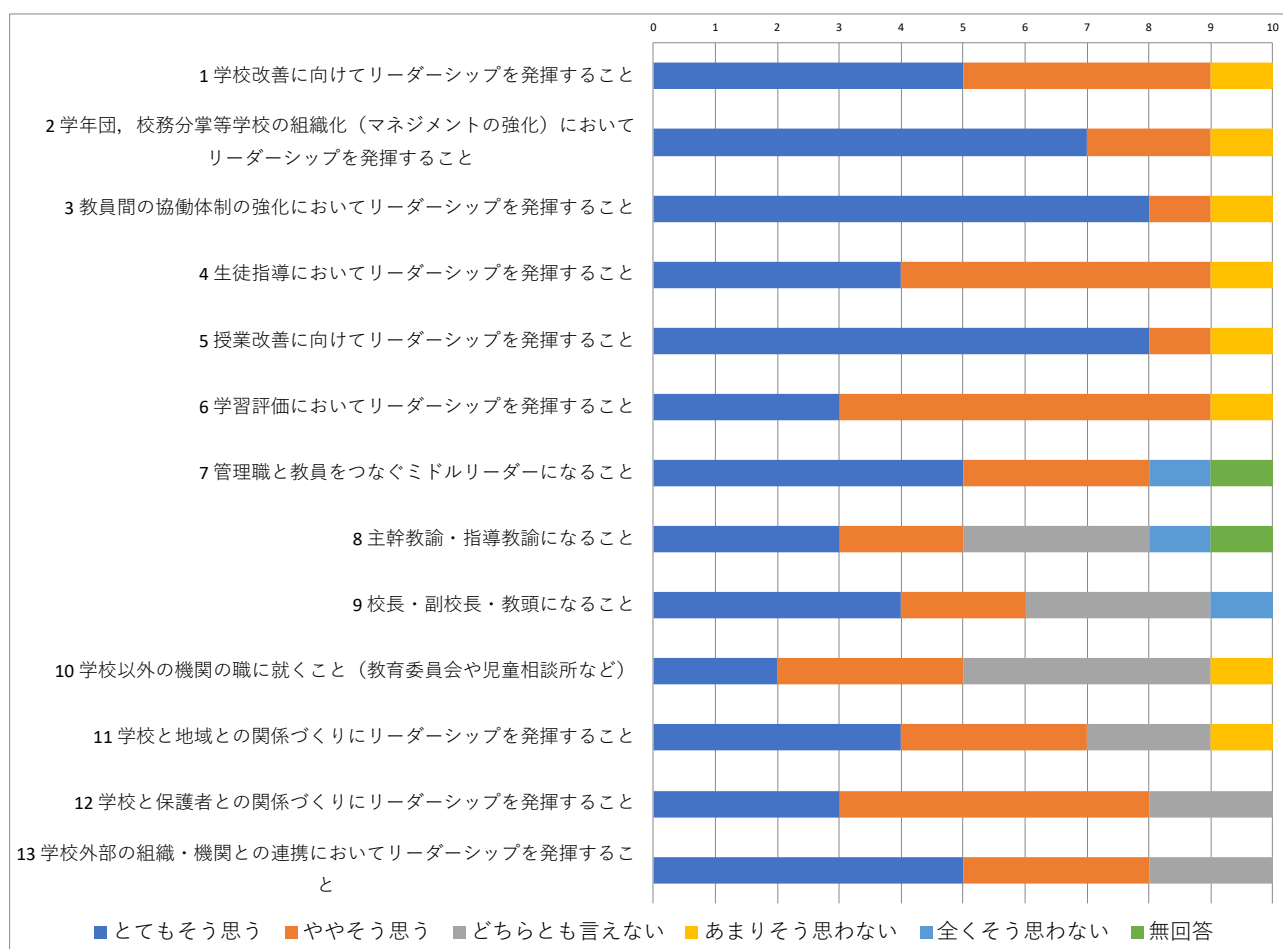


図 2-4 管理職が現職の修了生に期待する役割 (N=10)

全体的に肯定の割合が高いため、「とてもそう思う」の割合が高い項目に注目すると、「3 教員間の協働体制の強化においてリーダーシップを発揮すること」、「5 授業改善においてリーダーシップを発揮すること」（ともに 8 割）の 2 項目が最も高い。続いて、「2 学年団、校務分掌等学校の組織化（マネジメントの強化）においてリーダーシップを発揮すること」も、「とてもそう思う」が 7 割となっていた。これ以外にも、多くの項目において修了生に対する高い期待が示されているが、「8 主幹教諭・指導教諭になること」、「9 校長・副校長・教頭になること」、「10 学校以外の機関の職に就くこと」の肯定の割合は、他の項目に比べると低くなっていた。これは、修了生のリーダーシップへの高い期待と併せて考えると、管理職が修了生に期待することは「どの職に就くのか」ではなく「何をするのか」

に向けられているということであり、「どの職に就こうが、こういう役割を果たしてほしい」という機能面への期待の表れと見ることができよう。

同じ項目について、肯定の割合（「とてもそう思う」と「ややそう思う」の合計）を示したものが、表 2-3 である。この表には、コースごとの割合も示した。

どのコースの修了生についても期待が高い項目として、「1 学校改善においてリーダーシップを発揮すること」、「2 学年団、校務分掌等学校の組織化においてリーダーシップを発揮すること」、「3 教員間の協働体制の強化においてリーダーシップを発揮すること」、「4 生徒指導においてリーダーシップを発揮すること」、「5 授業改善においてリーダーシップを発揮すること」、「6 学習評価においてリーダーシップを発揮すること」、「7 管理職と教員をつなぐミドルリーダーになること」の7つの項目が挙げられる。これは、昨年度調査とほぼ同様の傾向である。

コースごとにみると、「授業実践」の修了生に関しては、上記の項目に加えて、「12 学校と保護者との関係づくりにリーダーシップを発揮すること」、「13 学校外部の組織・機関との連携においてリーダーシップを発揮すること」への期待も高くなっていた。「子ども支援」の修了生については、上記の7項目以外は肯定の割合が低い。「教育経営」の修了生については、全ての項目で期待が高かった。

表 2-3 管理職が現職の修了生に期待する役割（全体、コース別）

番号	項目	肯定の割合 (全体)	授業実践	子ども支援	教育経営
1	学校改善に向けてリーダーシップを発揮すること	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
2	学年団、校務分掌等学校の組織化(マネジメントの強化)においてリーダーシップを発揮すること	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
3	教員間の協働体制の強化においてリーダーシップを発揮すること	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
4	生徒指導においてリーダーシップを発揮すること	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
5	授業改善に向けてリーダーシップを発揮すること	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
6	学習評価においてリーダーシップを発揮すること	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
7	管理職と教員をつなぐミドルリーダーになること	80.0%	100.0%	66.7%	80.0%
8	主幹教諭・指導教諭になること	50.0%	50.0%	33.3%	60.0%
9	校長・副校長・教頭になること	60.0%	50.0%	33.3%	80.0%
10	学校以外の機関の職に就くこと(教育委員会や児童相談所など)	50.0%	50.0%	33.3%	60.0%
11	学校と地域との関係づくりにリーダーシップを発揮すること	70.0%	50.0%	33.3%	100.0%
12	学校と保護者との関係づくりにリーダーシップを発揮すること	80.0%	100.0%	33.3%	100.0%
13	学校外部の組織・機関との連携においてリーダーシップを発揮すること	80.0%	100.0%	33.3%	100.0%

(3) 教職大学院に望むこと

さらに、管理職が教職大学院に望むことに関して、図 2-5 にその結果をまとめた。ここでは、修了生・ストマスどちらの学校管理職に対しても、項目が共通であるため、現職・ストマスを区別せず、20名で集計を行っている。各項目について、「とても強く望む」、「少し望む」、「どちらとも言えない」、

「あまり望まない」、「全く望まない」の5件法で尋ねた結果である。

このうち最も肯定の割合（「とても強く望む」と「少し望む」の合計）が高いのが、「2 実習中の現職学生へのより積極的なサポート」（80.0%）で、続いて、「6 研修会等における講師や研究会での発表や指導助言」（75.0%）、「7 学校との共同研究」（65.0%）となっていた。続いて、「1 大学院生を送り出している管理職とのコミュニケーション」、「3 大学院生ではない教員の研修（教育センター等）への参加」の肯定の割合が高かった。肯定の割合が低かった項目として、「4 校長に対する学校運営上の助言」（25.0%）、「5 教育委員会に対する政策提言」（35.0%）が挙げられる。これらの回答傾向は、昨年度調査とほぼ同様である。

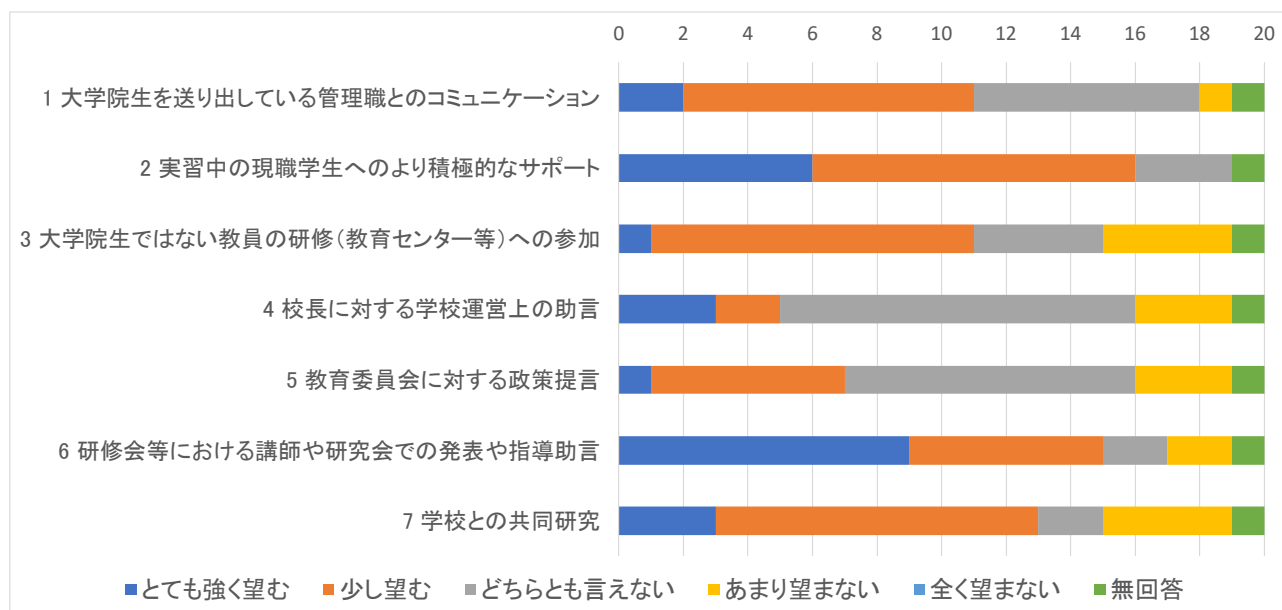


図 2-5 管理職が教職大学院に望むこと (N=20)

同じ項目について、肯定の割合を示したものが、表 2-4 である。この表には、現職とストマスという属性別の割合と、コースごとの割合の両方を示している。

まず、ストマスと現職の評価を比較すると、現職・ストマスとも「2 実習中の現職学生へのより積極的なサポート」を望む割合が高い。また、「6 研修会等における講師や研究会での発表や指導助言」、「7 学校との共同研究」についても、ストマス・現職双方で肯定が多くなっている。これに加えて、現職修了生勤務校の管理職は、「1 大学院生を送り出している管理職とのコミュニケーション」と「3 大学院生ではない教員の研修（教育センター等）への参加」を望む傾向が見られる。どちらも低いのが、「4 校長に対する学校運営上の助言」と「5 教育委員会に対する政策提言」である。

次に、コースごとに見ると、どのコースでも共通して肯定の割合が高いのは、「2 実習中の現職学生へのより積極的なサポート」と「6 研修会等における講師や研究会での発表や指導助言」の2つの項目であった。この他の項目については、コースごとに差が見られた。例えば、「授業実践」では、上記の2項目に加え、「7 学校との共同研究」の肯定の割合が高い。しかし、「4 校長に対する学校運営上の助言」は低い割合となっている。「子ども支援」では、「1 大学院生を送り出している管理職とのコミュニケーション」と「3 大学院生ではない教員の研修（教育センター等）への参加」の肯定の割合が高い。「教育経営」では、「3 大学院生ではない教員の研修（教育センター等）への参加」と「7 学校との共同研究」の肯定の割合が高く、「4 校長に対する学校運営上の助言」の割合が低くなっていた。

属性別でもコース別でも、評価が低い項目に関して考えると、「4 校長に対する学校運営上への助言」は、大学院生への教育を通じて学校運営に関わることが、「5 教育委員会に対する政策提言」については教育委員会の主催する各種委員会等で意見を述べることなどが該当する。しかし現実には、本大学院の教員の多くが、県教委や県庁の各種審議会の委員を務めたり、講演会の講師を務めたりしている。回答傾向からは、そのような事実が、回答者に伝わっていない可能性がある。

他方で、選択肢は将来に対する期待について聞いているのであって、必ずしも現状に対する満足度を反映しているとは限らない、ということは指摘しておくべきだろう。すなわち、「強く望む」という回答の場合、「現在は不十分なので、今後はそれを強く望む」ということもあり得るが、「現在のままでも十分なので、その継続を強く望む」という解釈も成り立つ。教職大学院へのニーズをより明確に析出するためにも、質問項目における用語法の精査が必要であろう。ただし、2 に関しては、「より」とあることから、今よりも積極的なサポートを求めているということであろう。

表 2-4 管理職が教職大学院に望むこと（全体、属性別、コース別）

番号	項目	肯定の割合 (全体)	現職	ストマス	授業実践	子ども支援	教育経営
1	大学院生を送り出している管理職とのコミュニケーション	55.0%	60.0%	50.0%	54.5%	75.0%	40.0%
2	実習中の現職学生へのより積極的なサポート	80.0%	80.0%	80.0%	81.8%	100.0%	60.0%
3	大学院生ではない教員の研修(教育センター等)への参加	55.0%	70.0%	40.0%	45.5%	75.0%	60.0%
4	校長に対する学校運営上の助言	25.0%	30.0%	20.0%	18.2%	50.0%	20.0%
5	教育委員会に対する政策提言	35.0%	50.0%	20.0%	27.3%	50.0%	40.0%
6	研修会等における講師や研究会での発表や指導助言	75.0%	90.0%	60.0%	72.7%	75.0%	80.0%
7	学校との共同研究	65.0%	70.0%	60.0%	72.7%	50.0%	60.0%

(4) 自由記述の結果

ここでは、管理職調査の自由記述の結果をまとめる。下の枠内の記述のうち、一重線は教職大学院での学習の「成果」を示すもの、波線は現在の修了生に関する様子を報告するもの、二重線は教職大学院への「要望」等を示すものである。

まず、現職修了生勤務校の管理職の意見は以下の通りである。まず、学びの成果（一重線）については、学校現場の教育課題に直結した実践研究がなされていること、教職員のキャリア・アップ、勤務校で果たすべき役割の自覚という点が挙げられていた。次に、現任校の様子（波線）としては、研究授業の合評会での指導の様子が肯定的に報告されている。教職大学院への要望（二重線）としては、教員の資質向上に継続的に寄与することだけでなく、発達障がいや不登校生徒への対応の方法に関する研修という具体的な項目も挙げられていた。

現在の教職大学院では、基礎理論はもちろんのこととして、学校現場の教育課題に直結した実践研究がなされていると思います。他校の院生の研究成果も情報収集し生かしていきたいと思います。今後も引き続き、教員の資質向上に寄与していただければ幸いです。

教職員としてのキャリアアップにつながる研修をしていただき、ありがとうございました。

本校には初任者が昨年、今年とそれぞれ2名おり、研究授業での合評会にて評価基準の考え方など文部科学省の指針をもとによく指導してくれ助かっている。教職大学院修了者に対して勤務校で果たすべき役割などご指導いただいていることに感謝いたします。

現場の教職員に対する発達障害の生徒の理解と対応方法並びに不登校生徒及び保護者への理解と対応に関する研修の機会の提供をお願いしたい。進学校においての喫緊の課題と考えています。

今後も継続的に、教職員の資質の向上のために、さらに、県全体の教育力の向上のために指導・助言をいただきたいと思います。

次に、ストマス勤務校の管理職の意見は以下の通りである。まず、学びの成果（一重線）については、学習指導・生徒指導・校務分掌・学級経営に関する基本的な力を育成できているという評価がなされていた。現任校の様子（波線）としても、学び続ける姿勢や、他の教員とのコミュニケーションに関する肯定的な様子が報告されている。教職大学院への要望（二重線）としては、即戦力となる教員育成だけでなく、中学生・高校生に対して教員を目指したくなるように積極的なアピールを行うという長期的戦略も挙げられていた。

教職大学院での経験は、初任者として十分以上の学習指導、生徒指導、校務分掌、学級経営に関する基本的な力を育成するのに役立っているものと考えます。学び続ける姿勢や他の職員とのコミュニケーションも良好です。

今後も、即戦力となる有能な人材の育成をお願いしたいと思います。

的外れなことを記入して申し訳ありません。絶対的に教員数が不足している今日の現状や、教職を目指す学生数が減少していることを鑑みますと、教職大学院のPRを積極的にしていただくことも教員不足の解消につながるのではないかと期待しています。特に高校生が教職を目指したくなるようなPRを考えていただければ嬉しく思います。加えて、中学生に対しても何らかの形で情報提供をしていただく機会があれば、教職に興味を持つ生徒が増えるかもしれないと思います。学校現場でも生徒たちが教職に就くことに憧れを抱くような教育ができればと日々頑張っておりますが、佐賀県の教員不足を解消するためにも貴教職大学院の益々のご発展をお祈りいたします。

佐賀県の人材育成に貢献していると思います。

3. 修了生調査の結果

ここでは、修了生に対する質問紙調査の結果を記述する。まず、共通する項目の評価について述べ、続いて各コースの科目に関する評価について述べる。

(1) 共通する項目への評価

①共通必修科目の評価

まず、修了生の「共通科目」（必修、及び選択必修）に関する評価をまとめたものが、図3-1である。

それぞれの項目において、共通科目をどの程度活かしたかを、「十分に活かしている」、「やや活かしている」、「どちらとも言えない」、「あまり活かしていない」、「全く活かしていない」の5件法で尋ねた結果を示している。

肯定の割合が高い順に挙げると「2 授業における実践的指導力の向上」(90.0%)、「5 現代的な学力観や学力育成への対応」(90.0%)、「7 子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応」(85.0%)、「3 教材開発能力の向上」(75.0%)、「12 自己のキャリアデザイン」(75.0%)、「6 いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談」(70.0%)となっていた。昨年度調査では、7 (90%)、2 (75.0%)、5 (75.0%)、1・6・12 (70%) の順となっており、今年度調査では「1 教育課程や年間指導計画に関する見通しをもった編成」が上位から消えた反面、3 が加わったということになる。

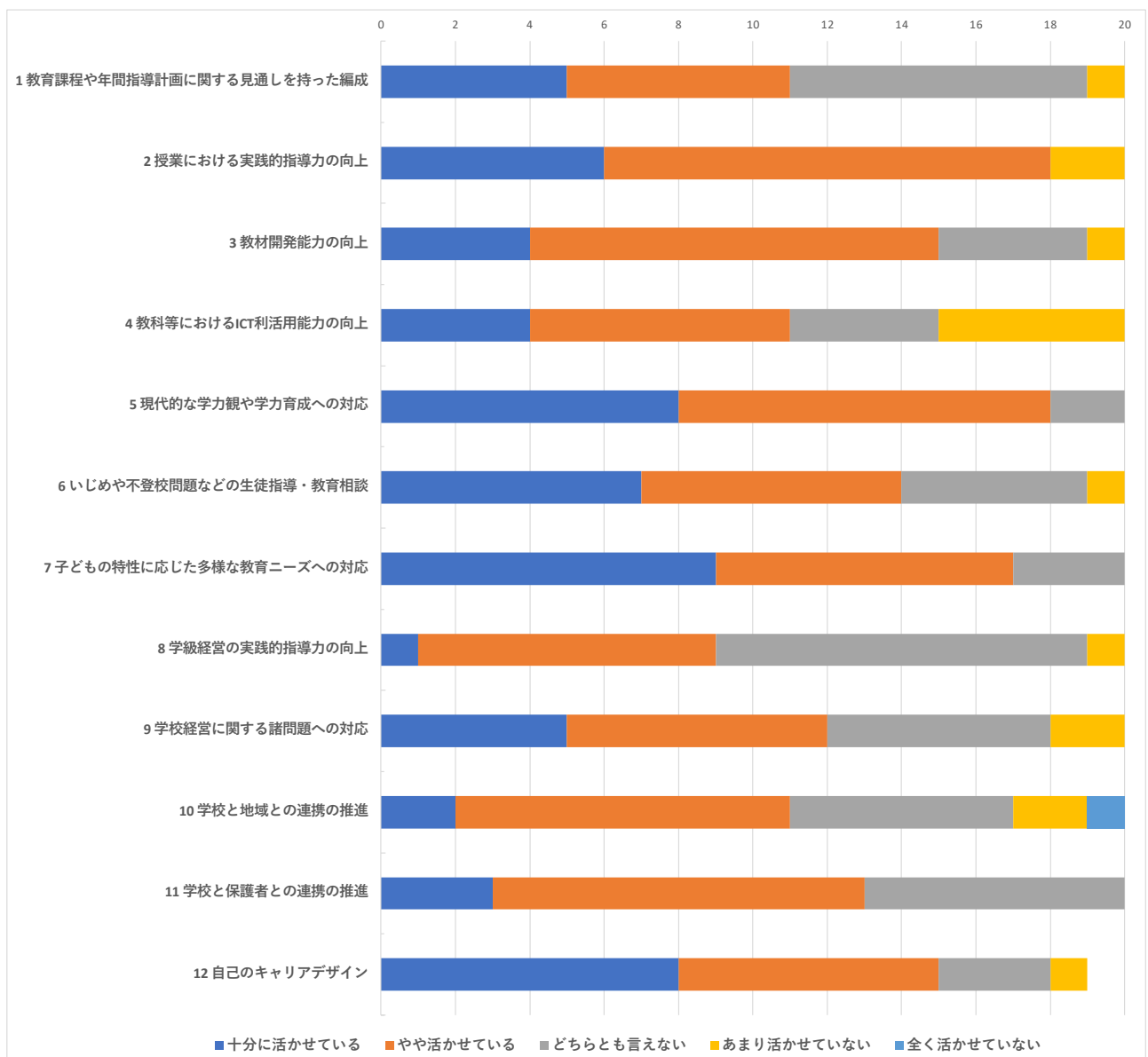


図 3-1 共通必修科目の評価 (N=20)

一方、肯定の割合が50%以下の項目としては、「4 教科等におけるICT活用能力の向上」、「8 学級経営の実践的指導力の向上」が挙げられる。昨年度調査では8・9・10・11が50%以下の値を示しており、逆に4は昨年度調査では65%と低くはなかった反面、今年度は9(昨年度50%→今年度60%)・

10 (45%→55%)・11 (50%→65%) の項目で、肯定の割合が高くなっている。8 に関しては後述する。

同じ項目について、肯定の割合（「十分に活かしている」と「やや活かしている」の合計）を示したものが、表 3-1 である。この表には、コース別の割合と、修了生の属性別の割合も示している。

いずれのコースにおいても「2 授業における実践的指導力の向上」、「5 現代的な学力観や学力育成への対応」、「7 子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応」、「12 自己のキャリアデザイン」については高い割合を示し、「4 教科等における ICT 利活用能力の向上」については低い割合を示している。これ以外の項目については、コースごとに回答の傾向が異なる。

表 3-1 共通必修科目に関する肯定の割合（全体、コース別、属性別）

番号	項目	肯定の割合 (全体)	授業実践	子ども支援	教育経営	ストマス	現職
1	教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成	55.0%	36.4%	50.0%	100.0%	30.0%	80.0%
2	授業における実践的指導力の向上	90.0%	90.9%	75.0%	100.0%	90.0%	90.0%
3	教材開発能力の向上	75.0%	81.8%	25.0%	100.0%	80.0%	70.0%
4	教科等におけるICT利活用能力の向上	45.0%	45.5%	50.0%	40.0%	50.0%	40.0%
5	現代的な学力観や学力育成への対応	90.0%	90.9%	75.0%	100.0%	80.0%	100.0%
6	いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談	70.0%	54.5%	75.0%	100.0%	50.0%	90.0%
7	子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応	85.0%	72.7%	100.0%	100.0%	80.0%	90.0%
8	学級経営の実践的指導力の向上	45.0%	27.3%	75.0%	60.0%	20.0%	70.0%
9	学校経営に関する諸問題への対応	60.0%	45.5%	50.0%	100.0%	40.0%	80.0%
10	学校と地域との連携の推進	55.0%	36.4%	50.0%	100.0%	30.0%	80.0%
11	学校と保護者との連携の推進	65.0%	54.5%	75.0%	80.0%	50.0%	80.0%
12	自己のキャリアデザイン	75.0%	63.6%	75.0%	100.0%	60.0%	90.0%

「授業実践」では、上記の項目以外に、「3 教材開発能力の向上」が高い割合を示す一方で、「1 教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成」、「8 学級経営の実践的指導力の向上」、「10 学校と地域との連携の推進」に関しては、5 割を下回る割合となっていた。昨年度高い割合を示していたのは、「1 教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成」、「2 授業における実践的指導力の向上」、「3 教材開発能力の向上」、「4 教科等における ICT 利活用能力の向上」、「7 子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応」であり、昨年度と比較すると肯定が高い項目の一部が入れ替わっている（2, 3, 7 は共通して高い）。2, 3, 5 の項目に該当する科目についてはコース担当教員が担当しており、コースにおける学びのニーズとも合致していたものと考えられる。昨年度と比較して肯定の割合が低くなっているのは、1, 「4 教科等における ICT 利活用能力の向上」、8 である。このコースの傾向として、授業における実践的指導力や教材開発能力の向上が顕著であり、この点は探究実習を中心とした科目の成果と捉えることができる。一方で初任者（ストマス）が約 8 割を占めるため、初めて行う教育課程や年間指導計画の編成、学級経営、学校と地域の連携において、大学院での学びを十分に活かすことが難しいと考えられる。これらから教員経験を積み重ねる中で、学びを活かせるように努めてもら

いたい。

「子ども支援」では、上記のどのコースでも共通して高い項目以外に、「6 いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談」、「8 学級経営の実践的指導力の向上」、「11 学校と保護者との連携の推進」が高い割合を示している。昨年度高い割合を示していたのは1, 2, 4, 5, 6, 7, 9, 12の8項目であったのに対して、今年度は2, 5, 6, 7, 8, 11, 12の7項目であった。肯定的な項目数は、ほぼ変わらないが、項目番号には違いが見られた。「子ども支援」は、生徒指導、教育相談、特別支援教育など、多様な教育ニーズに対する支援について学ぶコースであるため、その成果としてこれらの項目の評価が高くなったと考えられる。一方で、「3 教材開発能力の向上」は低い割合を示していた。「子ども支援」での研究テーマは学内の支援体制の構築など授業外のことも多く、その場合は教材開発を積極的に行うわけではないので、このような評価になった可能性がある。

「教育経営」では、上記の2, 5, 7, 12に加えて、「1 教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成」、「3 教材開発能力の向上」、「6 いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談」、「9 学校経営に関する諸問題の対応」、「10 学校と地域との連携の推進」、「11 学校と保護者との連携の推進」が高い割合を示している。昨年度高い割合を示していたのは、「2 授業における実践的指導力の向上」、「5 現代的な学力観や学力育成への対応」、6、「7 子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応」、9, 10, 11, 12であり、肯定的に回答された項目が増加している。また、このうち9, 10, 11, 12の項目に該当する科目はコース教員が担当しており、コースにおける学びのニーズとも合致していたものと考えられる。

次に、属性ごとにみると、「2 授業における実践的指導力の向上」、「3 教材開発能力の向上」、「5 現代的な学力観や学力育成への対応」、「7 子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応」、「12 自己のキャリアデザイン」といった項目が、ストマスと現職で共通して高い割合を示していた。

「1 教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成」、「6 いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談」、「8 学級経営の実践的指導力の向上」、「9 学校経営に関する諸問題の対応」、「10 学校と地域との連携の推進」、「11 学校と保護者との連携の推進」については、現職教員の方が肯定の割合が高かった。これは、これまでの学校での経験が土台となることで、大学院の学びをその上に積み上げられたことが要因と考えられる。一方で、ストマスでは「8 学級経営の実践的指導力の向上」など低い割合を示す項目が見られたが、大学院の授業の中で理論や知識として学んでいても、なかなか1年目から学級経営や教育課程編成など十二分に行えるわけではないと考えられる。また、学級経営に関しては、令和2年度に実施した第3期修了生対象の追跡調査において肯定的回答の割合が低かったが、調査報告においてこの点は教職大学院として改善すべき事項である旨明記した³。これを受けて令和3年度初めに、特に新たな授業を設置することはしないが、こういった回答傾向に対応するため、既存の授業において学級経営上の留意事項等も検討課題とするよう全教員に周知した。その結果が表れるのは令和3年度の修士1年生が修了生調査の対象となるとき、つまり2023（令和5）年度調査時点であることは、附言しておく。

②大学院の施設・設備や学生生活に関する満足度

次に、教職大学院の施設・設備や、学生生活に関する満足度を尋ねた結果を図3-2に示した。各項目につき、「とても満足している」、「やや満足している」、「どちらとも言えない」、「あまり満足してい

³ 佐賀大学大学院学校教育学研究科専任教員一同「佐賀大学大学院学校教育学研究科（教職大学院）第3期修了生追跡調査結果の概要」前掲。

ない」,「全く満足していない」の5件法で尋ねたものである。

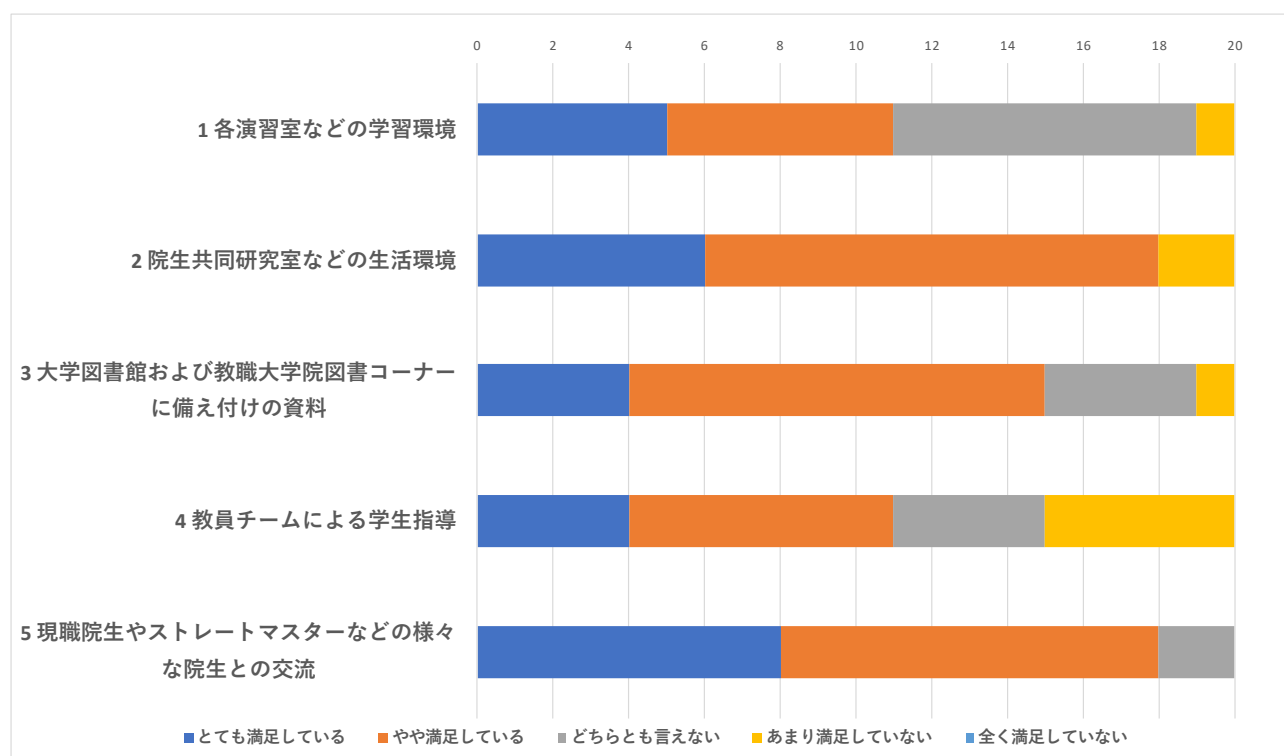


図 3-2 大学院の施設・設備や学生生活に関する満足度 (N=20)

これを見ると、どの項目についても満足度が高いが、「2 院生共同研究室などの生活環境」、「4 教員チームによる学生指導」、「5 現職院生やストレートマスターなどの様々な院生との交流」が特に高い割合を示していた。2については、例えば毎年蔵書の拡充やPCなど設備の充実を行っている。4については、共通必修科目はすべて研究者教員と実務家教員のチーム・ティーチングにより実施している。また、子ども支援及び教育経営では、教育実践課題研究Ⅰ・Ⅱをコース所属全教員と各学年の全学生が参加しての集団指導体制を採っている。5に関しては、特に共通必修科目における学生による発表を、多くの場合現職とストマスとのペアで行うことにしており、発表準備の中で学び合いが生じている。これらの取組みが功を奏しているということであろう。回答傾向は、昨年度調査とほぼ同様である。

同じ項目について、「とても満足している」と「やや満足している」の合計の割合を示したものが、表 3-2 である。

表 3-2 大学院の施設・設備や学生生活に関する満足度 (全体, コース別, 属性別)

番号	項目	肯定の割合 (全体)	授業実践	子ども支援	教育経営	ストマス	現職
1	各演習室などの学習環境	85.0%	81.8%	75.0%	100.0%	90.0%	80.0%
2	院生共同研究室などの生活環境	90.0%	90.9%	75.0%	100.0%	100.0%	80.0%
3	大学図書館および教職大学院図書コーナーに備え付けの資料	85.0%	72.7%	100.0%	100.0%	80.0%	90.0%
4	教員チームによる学生指導	90.0%	90.9%	75.0%	100.0%	90.0%	90.0%
5	職院生やストレートマスターなどの様々な院生との交流	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

この結果を見ると、コースごと、あるいは属性ごとの差はほとんどみられず、一律に高い割合となっている。ただし、「5 現職院生やストレートマスターなどの様々な院生との交流」を除く4項目においては、あまり満足していないと回答した修了生も数名いるため、施設・整備面での継続的な改善が必要であると考えられる。

③ 教職大学院で学んだ成果（ストマス、現職別）

さらに、教職大学院で学んだ成果について回答を求めた。この設問の内容は、図 2-1、図 2-2 で示した管理職調査と同じものであり、各項目について「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の5件法で尋ねた結果である。ただし、管理職の調査項目に、「18 学会発表や論文の公表など、学校教育の発展に資する研究活動ができるようになった」、「19 研修などの自己研鑽の機会を活かし、積極的に学ぶようになった」という2項目を加えている。なお、ストマス20項目、現職30項目と項目数が異なっている。

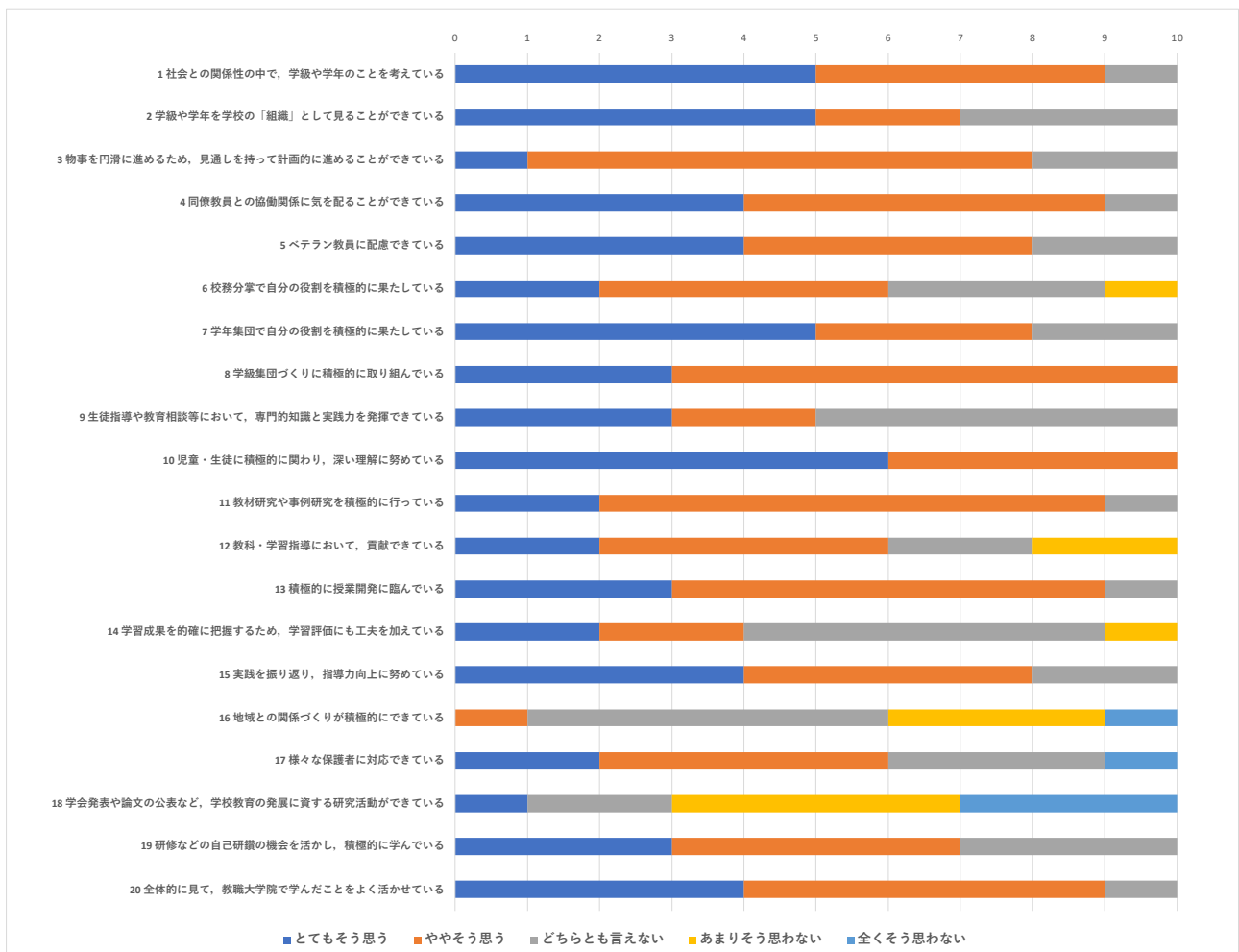


図 3-3 教職大学院で学んだ成果（ストマス、N=10）

ストマスの結果を見ると（図 3-3）、全体で肯定の割合が9割を超える項目としては、「8 学級集団づくりに積極的に取り組んでいる」、「10 児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている」（ともに 100.0%）、「1 社会との関係性の中で、学級や学年のことを考えている」、「4 同僚教員との協働関係に気を配ることができている」、「11 教材研究や事例研究を積極的に行っている」、「13 積極的に授業開

発に臨んでいる」、「20 全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている」（ともに 90.0%）が挙げられる。この他に肯定の割合が8割を超える項目として、「3 物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができる」、「5 ベテラン教員に配慮できている」、「7 学年集団で自分の役割を積極的に果たしている」、「15 実践を振り返り、指導力向上に努めている」（以上、80.0%）という項目が挙げられる。

同じ項目について、肯定の割合（「とてもそう思う」と「ややそう思う」の合計）を示したものが、表 3-3 である。

表 3-3 教職大学院で学んだ成果（ストマス、コース別）

番号	項目	肯定の割合 (全体)	授業実践	子ども支援
1	社会との関係性の中で、学級や学年のことを考えている	90.0%	88.9%	100.0%
2	学級や学年を学校の「組織」として見ることができている	70.0%	77.8%	0.0%
3	物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができる	80.0%	88.9%	0.0%
4	同僚教員との協働関係に気を配ることができている	90.0%	88.9%	100.0%
5	ベテラン教員に配慮できている	80.0%	77.8%	100.0%
6	校務分掌で自分の役割を積極的に果たしている	60.0%	66.7%	0.0%
7	学年集団で自分の役割を積極的に果たしている	80.0%	88.9%	0.0%
8	学級集団づくりに積極的に取り組んでいる	100.0%	100.0%	100.0%
9	生徒指導や教育相談等において、専門的知識と実践力を発揮できている	50.0%	55.6%	0.0%
10	児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている	100.0%	100.0%	100.0%
11	教材研究や事例研究を積極的に行っている	90.0%	100.0%	0.0%
12	教科・学習指導において、貢献できている	60.0%	66.7%	0.0%
13	積極的に授業開発に臨んでいる	90.0%	100.0%	0.0%
14	学習成果を的確に把握するため、学習評価にも工夫を加えている	40.0%	44.4%	0.0%
15	実践を振り返り、指導力向上に努めている	80.0%	88.9%	0.0%
16	地域との関係づくりが積極的にできている	60.0%	55.6%	100.0%
17	様々な保護者に対応できている	60.0%	55.6%	100.0%
18	学会発表や論文の公表など、学校教育の発展に資する研究活動ができている	10.0%	11.1%	0.0%
19	研修などの自己研鑽の機会を活かし、積極的に学んでいる	70.0%	77.8%	0.0%
20	全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている	90.0%	88.9%	100.0%

コースごとにみると、「1 社会との関係性の中で、学級や学年のことを考えている」、「4 同僚教員と

の協働関係に気を配ることができている」、「8 学級集団づくりに積極的に取り組んでいる」、「10 児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている」は、全てのコースで8割以上の回答の割合となっている。「20 全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている」ことへの評価も、全てのコースで8割以上の割合となっていた。

この他にも多くの項目で肯定の割合が高くなっているが、「9 生徒指導や教育相談等において、専門的知識と実践力を発揮できている」、「14 学習成果を的確に把握するため、学習評価にも工夫を加えている」、「18 学会発表や論文の公表など、学校教育の発展に資する研究活動ができている」については5割以下の回答の割合となっている。肯定的な割合が高い項目は、「考えている」、「取り組んでいる」など個人の努力に関する評価であるが、肯定の割合が低かった項目は「発揮できている」「工夫を加えている」のように一定以上の水準を評価するものであったため、教職1年目においてはその域に達することは難しいことが推測される。「子ども支援」においては、他にも多くの項目で低い評価であった。管理職からの評価も低かったため、自分ができていないということを自覚する機会が多いと推測される。「子ども支援」で学ぶことは、すぐに教育実践力として現れにくいということもあるが、できていないことを自覚することは、今後の取り組むべきポイントを認識しているということにもなるので、これからの努力に期待したい。大学院での学びについては、入学時や各授業時のオリエンテーションなどの機会を通じて、学ぶ内容の明確化や意義の再認識などを丁寧に行う。そして、授業において現職教員との話し合いを充実させて現場での実践力を涵養するよう引き続き努める。

次に現職の結果を見ると(図 3-4)、全体で肯定の割合が9割を超える項目としては、「1 学校全体の視野で、物事を見ることができている」、「2 社会との関係性の中で、学校のことを考えられている」、「3 学校を『組織』として見ることができている」、「4 物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができている」、「5 学校教育目標の実現に向けて、短期的・長期的視野で考えて取り組むことができている」、「9 同僚教員との協働関係に気を配れている」、「19 児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている」、「20 教材研究や事例研究を積極的に行うことができている」、「24 実践を振り返り、指導力向上に努めている」(ともに 100.0%)、「7 学校が抱える教育課題の改善に向けて、課題意識を持って主体的に取り組んでいる」、「22 積極的に授業開発に臨んでいる」、「23 学習成果を的確に把握するため、学習評価にも工夫を加えている」、「27 様々な保護者に対応する能力が高い」、「29 研修などの自己研鑽の機会を活かし、積極的に学んでいる」、「30 全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている」(ともに 90.0%)が挙げられる。

この他に肯定の割合が8割を超える項目として、「6 様々な企画・立案を行い、学校運営に積極的に貢献できている」、「10 若手(自分より年齢が下の)教員に対する指導力・助言力が高い」、「11 ベテラン教員に配慮できている」、「13 校務分掌で、リーダーシップを発揮できている」、「16 校内研究や研修等において、リーダーシップを発揮できている」、「17 様々な場面で、スクールリーダーとしての自覚が高い」(以上、80.0%)という項目が挙げられる。割合の低い項目としては、「14 学年集団で、リーダーシップを発揮できている」、「25 研修会での講師を任されるなど、学校外でも貢献できている」、「26 地域との関係づくりに積極的である」が50%であった。昨年度調査において割合が低いのは「25 研修会での講師を任されるなど、学校外でも貢献できるようになった」(50%)、「26 地域との関係づくりに積極的になった」(40%)、「28 学会発表や論文の公表など、学校教育の発展に資する研究活動ができるようになった」(20%)の3項目であり、70%が2項目、80%が6項目、90%が7項目、100%が12項目と、今年度よりも高い割合に傾斜する傾向にあった。今年度調査も全体としてみれば肯定の割合は高いが、昨年度の方が、その傾向は顕著であったと言える。

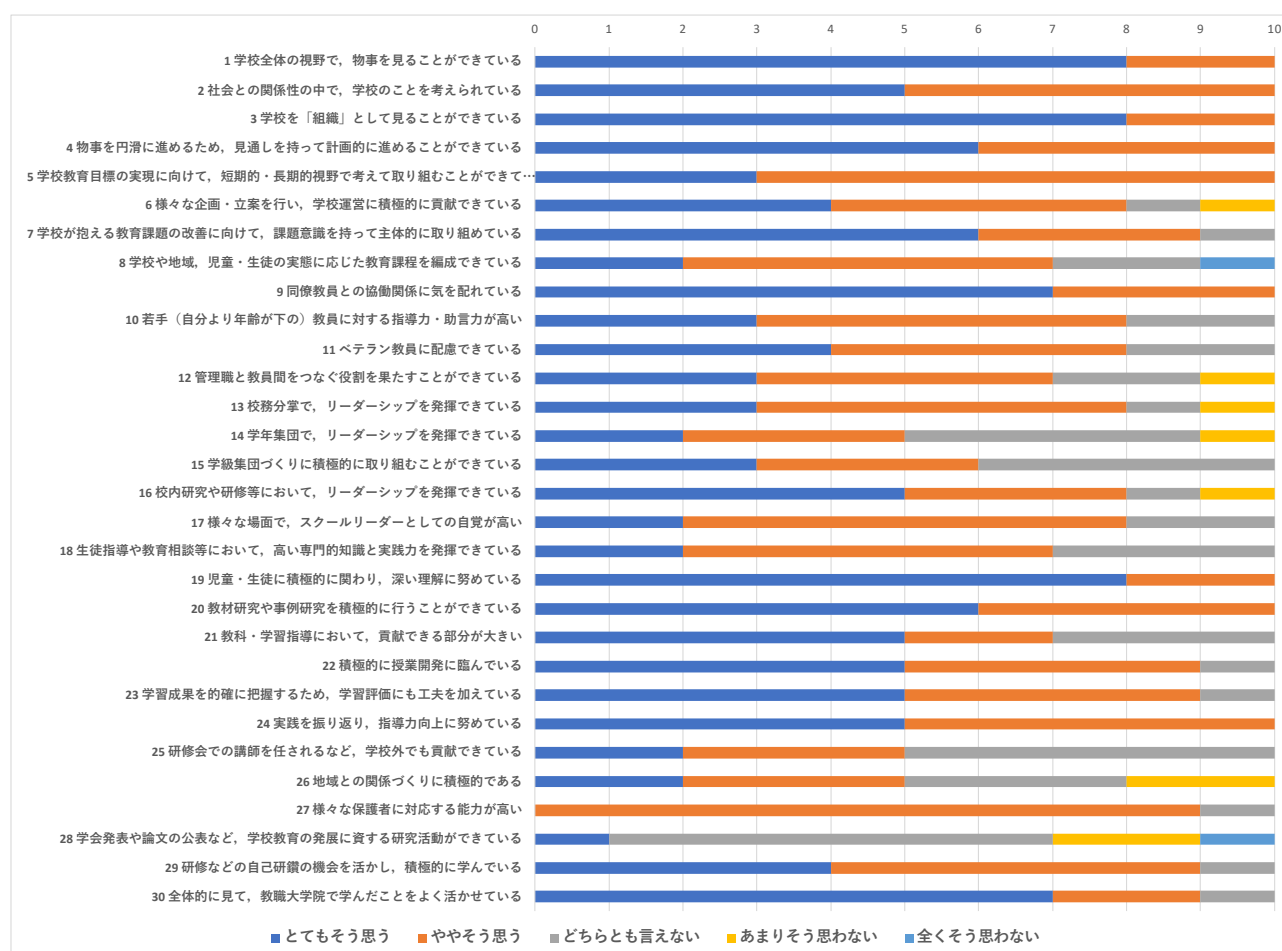


図 3-4 教職大学院で学んだ成果（現職、N=10）

同じ項目について、肯定の割合（「とてもそう思う」と「ややそう思う」の合計）を示したものが、表 3-4 である。

コース別に割合を見た際に、どのコースでも 8 割以上の回答の割合となっているのが、「1 学校全体の視野で、物事を見ることができている」、「2 社会との関係性の中で、学校のことを考えられている」、「3 学校を『組織』として見ることができている」、「4 物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができている」、「5 学校教育目標の実現に向けて、短期的・長期的視野で考えて取り組むことができている」、「9 同僚教員との協働関係に気を配れている」、「19 児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている」、「20 教材研究や事例研究を積極的に行うことができている」、「24 実践を振り返り、指導力向上に努めている」という項目である。

この他にも多くの項目で肯定の割合が高くなっているが、「14 学年集団で、リーダーシップを発揮できている」、「25 研修会での講師を任されるなど、学校外でも貢献できている」、「26 地域との関係づくりに積極的である」については 5 割以下の回答の割合となっている。リーダーシップや学校外での貢献、地域との連携づくりはミドルリーダーとして期待される役割ではあるが、大学院での学びを学校現場に戻った際に活かして貢献することは、時間をかけて達成されるものだと考えられる。

表 3-4 教職大学院で学んだ成果（現職，コース別）

番号	項目	肯定の割合 (全体)	授業実践	子ども 支援	教育経営
1	学校全体の視野で、物事を見ることができている	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
2	社会との関係性の中で、学校のことを考えられている	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
3	学校を「組織」として見ることができている	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
4	物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができている	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
5	学校教育目標の実現に向けて、短期的・長期的視野で考えて取り組むことができている	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
6	様々な企画・立案を行い、学校運営に積極的に貢献できている	80.0%	50.0%	100.0%	80.0%
7	学校が抱える教育課題の改善に向けて、課題意識を持って主体的に取り組んでいる	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
8	学校や地域、児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成できている	70.0%	50.0%	66.7%	80.0%
9	同僚教員との協働関係に気を配れている	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
10	若手（自分より年齢が下の）教員に対する指導力・助言力が高い	80.0%	100.0%	66.7%	80.0%
11	ベテラン教員に配慮できている	80.0%	100.0%	66.7%	80.0%
12	管理職と教員間をつなぐ役割を果たすことができている	70.0%	50.0%	33.3%	100.0%
13	校務分掌で、リーダーシップを発揮できている	80.0%	50.0%	66.7%	100.0%
14	学年集団で、リーダーシップを発揮できている	50.0%	50.0%	66.7%	40.0%
15	学級集団づくりに積極的に取り組むことができている	60.0%	100.0%	66.7%	40.0%
16	校内研究や研修等において、リーダーシップを発揮できている	80.0%	50.0%	66.7%	100.0%
17	様々な場面で、スクールリーダーとしての自覚が高い	80.0%	50.0%	66.7%	100.0%
18	生徒指導や教育相談等において、高い専門的知識と実践力を発揮できている	70.0%	50.0%	66.7%	80.0%
19	児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
20	教材研究や事例研究を積極的に行うことができている	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
21	教科・学習指導において、貢献できる部分が大きい	70.0%	50.0%	33.3%	100.0%
22	積極的に授業開発に臨んでいる	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
23	学習成果を的確に把握するため、学習評価にも工夫を加えている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
24	実践を振り返り、指導力向上に努めている	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
25	研修会での講師を任されるなど、学校外でも貢献できている	50.0%	50.0%	66.7%	40.0%
26	地域との関係づくりに積極的である	50.0%	0.0%	0.0%	100.0%
27	様々な保護者に対応する能力が高い	90.0%	50.0%	100.0%	100.0%
28	学会発表や論文の公表など、学校教育の発展に資する研究活動ができている	70.0%	50.0%	100.0%	60.0%
29	研修などの自己研鑽の機会を活かし、積極的に学んでいる	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%
30	全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている	90.0%	100.0%	66.7%	100.0%

(2) コースごとの評価

ここでは、コースごとに設問が異なる調査の結果を示す。まず、各コースの専門科目の評価を示したものが、表 3-5（授業実践）、表 3-6（子ども支援）、表 3-7（教育経営）である。専門科目を受講して、以下に挙げる力が身についたかを「とても身についた」、「やや身についた」、「どちらとも言えない」、「あまり身につかなかった」、「全く身につかなかった」の 5 件法で尋ねた結果である。「授業実践」と「子ども支援」には現職とストマスの双方が所属しているため、表 3-5 と表 3-6 には、上段に全体の割合を示し、下段の左にストマス、下段の右に現職の回答の割合を示した。「教育経営」には現職しか所属していないため、表 3-7 は上下段に分けていない。

「授業実践」では（表 3-5）、「3 各教科の授業における指導力」、「5 それぞれの専門教科と学習評価を開発する力」について低い評価であった。授業で基礎的知識、理論を学修し、探究実習では開発した教材をもとに授業を実施している。しかし、実際に探究実習で開発した教材や実際に行った授業はある特定の 1 単元分である。そのことを踏まえると、学習した知識や理論を普段の教材開発や授業では十分に活用できていないと考えられる。評価が低かった 2 項目に対しては、これからの教員生活の中で学び続け、その力を十分身につけてもらいたい。なお、昨年度調査と比較して割合が低くなっているのは「授業を実践し目的に応じて分析する力」（100%→90.9%）、「3 各教科の授業における指導力」（90.9%→72.7%）、「4 各教科の内容について研究する力」（100%→90.9%）、「5 それぞれの専門教科と学習評価を開発する力」（81.8%→72.7%）の 5 項目であった。7 項目のうち 5 項目において割合が少し低くなっていることがわかる。今年度調査も全体としてみれば肯定の割合は高いが、昨年度の方が、その傾向は顕著であったと言えよう。

表 3-5 授業実践コースの専門科目の評価（全体：N=11，ストマス：N=9，現職：N=2）

番号	項目	肯定の割合 (全体)	ストマス	現職
1	学力と学習評価について考察する力	100.0%	100.0%	100.0%
2	授業を実践し目的に応じて分析する力	90.9%	88.9%	100.0%
3	各教科の授業における指導力	72.7%	77.8%	50.0%
4	各教科の内容について研究する力	90.9%	88.9%	100.0%
5	それぞれの専門教科の教材と学習評価を開発する力	72.7%	66.7%	100.0%
6	それぞれの専門教科の教材と学習評価を省察する力	81.8%	77.8%	100.0%

「子ども支援」では生徒指導の機能を活用し、子どもに自己指導能力と社会的リテラシーを育成する力が、他の項目より評価が低かった（表 3-6）。また、ストマスでは、発達障害のある児童生徒に対して具体的なアプローチを考える力、地域における特別支援教育の理解、子どものアセスメントについて低い評価であった。昨年度調査では全ての項目で肯定の割合が 100%となっていた。今年度評価が低くなった原因として、コロナ禍によって M2 での実践の機会が十分でなかったことが挙げられる。授業で学ぶことでそれぞれの基礎的知識、理論を学ぶことができたが、それを活用するという部分に

はまだ自信がないということだと考えられる。発達障害のある児童生徒に対して、そのニーズに応じて複数のアプローチを考えることや、生徒指導で子どもの自己指導力を育成することはベテランの教員でも難しい。現時点で評価の低い4項目については、教員生活の中で学び続け、試行錯誤しながらその力を獲得してもらいたい。

表 3-6 子ども支援コースの専門科目の評価（全体：N=4，ストマス N=1，現職：N=3）

番号	項目	肯定の割合 (全体)	ストマス	現職
1	不登校やいじめなどに対して、複数の具体的なアプローチを考える力	100.0%	100.0%	100.0%
2	児童生徒の学習意欲や態度について、心理学的な観点からの理解	100.0%	100.0%	100.0%
3	発達障害のある児童生徒に対して、ニーズに応じて教室でできる複数の具体的なアプローチを考える力	75.0%	0.0%	100.0%
4	自殺予防教育やストレスマネジメント教育などの心理教育を具体的に実践する力	100.0%	100.0%	100.0%
5	地域における特別支援教育の相談機関や制度などについての理解	75.0%	0.0%	100.0%
6	児童福祉のあり方、及び児童福祉と教育の関連性や連携のあり方に関する理解	100.0%	100.0%	100.0%
7	生徒指導の機能を活用し、子どもに自己指導能力と社会的リテラシーを育成する力	50.0%	0.0%	66.7%
8	子どもを対象とした知能、パーソナリティ、メンタルヘルスおよび学級集団に関するアセスメント手法を理解し、学校現場で活用できる力	75.0%	0.0%	100.0%

表 3-7 教育経営コースの専門科目の評価（N=5）

番号	項目	肯定の割合 (全体)
1	学校を「組織」として捉える視点	100.0%
2	現任校の諸課題を構造的に理解する能力	100.0%
3	現任校における自分の位置付けを相対化できる能力	100.0%
4	現任校の課題を解決するための組織づくりの方法	100.0%
5	学校組織におけるリーダーシップの重要性	100.0%
6	ミドルリーダーとして学校改善のために行動する能力	100.0%
7	教職員の「協働」の重要性への理解	100.0%
8	学校教育目標に関する短期的・長期的な視点	100.0%
9	教員評価や学校評価など、自らの活動への評価に関する理解	100.0%
10	地域や保護者との連携を推進する力	100.0%
11	学校における危機管理能力	100.0%

「教育経営」は、すべての項目で肯定の割合が100%となっており（表3-7）、昨年度調査と同様の結果である。

ただし、こうした結果は修了生の意識上のことである。現任校の実践に反映されているかは、図2-1、図2-2の管理職の評価とも合わせて検討する必要がある。

次に、各コースの実習科目に関する評価を示したものが、表3-8（授業実践・現職）、表3-9（授業実践・ストマス）、表3-10（子ども支援・現職）、表3-11（子ども支援・ストマス）、表3-12（教育経営）である。ここでは「とても身についた」、「やや身についた」の合計の肯定の割合のみを示している。

「授業実践」の現職については、全ての項目で100%と高い回答率になっていた（表3-8）。「授業実践」のストマス（表3-9）に関してまず全体的に見てみると、昨年度調査と比較して肯定的な割合が低くなっているのは「3 特別な配慮を要する児童生徒へのケア」（77.8%→22.2%）、昨年と割合が同じなのは「4 学級経営力」（22.2%→22.2%）「7 計画に即して授業研究を行う能力」（88.9%→88.9%）、「8 授業研究の成果を活かして授業実践を行う能力」（100%→100%）であり、この他の4項目は高くなっていた。その上で上述の諸点に関連して見てみると、次のようなことを指摘できるだろう。まず、1年次の全20回の実習のうち、前半約10回が集中、後半約10回が週1回の約4ヵ月にわたる実習となっている。全体としてみれば、長期間にわたって児童生徒と関わり、その変容を観察できるよい機会となった。しかし、長期間といっても、前半の10回は児童生徒や実習校に慣れる期間であり、後半は週1回しか実習に行かないことを考えると、学級経営に直接関わったりする機会はほとんどなかったため、低い評価となっていると考えられる。また、特別な配慮を要する児童生徒へのケアは、実習に配属される学校や学級により該当する児童生徒の有無などが変わってくる。本年度の配属高は高等学校4名、中学校3名、小学校2名であり、昨年度は高等学校2名、中学校4名、小学校3名であったが、それが結果に影響している可能性もある。特別な配慮を要する児童生徒へのケアや学級経営に関わる経験を多くするように実習計画を進めていく必要があるだろう。

表3-8 授業実践コース（現職）の実習科目の評価（N=2）

実習	項目	肯定の割合 (全体)
異校種実習 (1年次)	異校種の教育活動に対する理解	100.0%
	異校種における授業実践に対する理解	100.0%
	異校種における児童・生徒に対する理解	100.0%
	異校種における教員文化に対する理解	100.0%
学校変革 試行実習 (2年次)	学校の課題について把握する能力	100.0%
	理論を活用して学校変革の計画を立てる能力	100.0%
	計画に即して授業研究を行う能力	100.0%
	授業研究の成果を活かして授業実践を行う能力	100.0%

表 3-9 授業実践コース（ストマス）の実習科目の評価（N=9）

実習	項目	肯定の割合 (全体)
基盤実習 (1年次)	教科等指導力	66.7%
	児童生徒とのコミュニケーション力	100.0%
	特別な配慮を要する児童生徒へのケア	22.2%
	学級経営力	22.2%
学校課題 探究実習 (2年次)	教科等指導力	100.0%
	児童生徒とのコミュニケーション力	100.0%
	計画に即して授業研究を行う能力	88.9%
	授業研究の成果を活かして授業実践を行う能力	100.0%

次に、「子ども支援」の現職（表 3-10）の結果について、昨年度調査と比較すると、「学校外での人的ネットワークの形成」（100%→66.7%）、「計画を立てて改革を進める能力」（100%→66.7%）、「スクールリーダーとしての教育実践力・指導力」（100%→33.3%）の項目で肯定的な割合が低くなっていた。このうち、特に肯定的な割合が低くなっていた「スクールリーダーとしての教育実践力・指導力」についてであるが、「子ども支援」では特別支援のコーディネーターなど支援に中心的に携わる役割について学んでいるため、校長や教頭といったスクールリーダーとしての姿がイメージしにくかったのではないかと考えられる。また、「子ども支援」のストマス（表 3-11）においては、昨年度調査と比較して、「教科指導力」（100%→0%）、「特別な配慮を要する児童生徒へのケア」（100%→0%）の項目で肯定的な割合が低くなっていた。当該修了生は実践研究で生徒の感情コントロールをテーマに掲げ取り組んだため、多くの生徒と関わる機会となった。一方で、教科指導や特別な配慮を要する生徒へのケア、学級経営については十分に実践する機会がなかったため、低い評価となっていると考えられる。個人の研究テーマによるので、ここで示される項目を「子ども支援」の全ての院生が経験するわけではないが、実習校との協議の中で、できるだけ経験する機会を設けられるように進めていく必要があるだろう。

「教育経営」に関しては、すべての項目に関して肯定度が 100%となっていた（表 3-12）。昨年度調査では、1 年次関係機関実習における「学校外での人的ネットワークの形成」と、2 年次学校変革試行実習における「現任校の課題に即した組織づくりの能力」、「計画を立てて改革を進める能力」、「リサーチプランを立てて、研究を実施する能力」、「スクールリーダーとしての教育実践力・指導力」の 5 項目が 80%であり、それ以外の項目は 100%であった。ただし、「教育経営」の学生は 1 学年 5 名であるため、この回答の差は 1 名の回答傾向の違いによるものであって、前年度・今年度とも概ね良好な調査結果であると言えよう。

表 3-10 子ども支援コース（現職）の実習科目の評価（N=3）

実習	項目	肯定の割合 (全体)
関係機関 実習 (1年次)	異関係機関（児童相談所、適応指導教室）の役割や職務に対する理解	100.0%
	関係機関（児童相談所、適応指導教室）の職務と学校の課題の関係性に対する理解	100.0%
	学校以外の組織の役割や運営方法に対する理解	100.0%
	学校外での人的ネットワークの形成	66.7%
学校変革 試行実習 (2年次)	現任校の課題に即した組織づくりの能力	66.7%
	計画を立てて改革を進める能力	66.7%
	現任校の課題に即した問題解決能力	100.0%
	実践の中で、問題の構造への理解を深めていく能力	100.0%
	リサーチプランを立てて、研究を実施する能力	100.0%
	スクールリーダーとしての教育実践力・指導力	33.3%

表 3-11 子ども支援コース（ストマス）の実習科目の評価（N=1）

実習	項目	肯定の割合 (全体)
基盤実習 (1年次)	教科等指導力	0.0%
	児童生徒とのコミュニケーション力	100.0%
	特別な配慮を要する児童生徒へのケア	0.0%
	学級経営力	0.0%
学校課題 探究実習 (2年次)	教科等指導力	0.0%
	児童生徒とのコミュニケーション力	100.0%
	特別な配慮を要する児童生徒へのケア	0.0%
	学級経営力	0.0%

表 3-12 教育経営コースの実習科目の評価 (N=5)

実習	項目	肯定の割合 (全体)
関係機関 実習 (1年次)	教育委員会の役割や職務に対する理解	100.0%
	教育委員会の職務と学校の課題の関係性に対する理解	100.0%
	学校以外の組織の役割や運営方法に対する理解	100.0%
	学校外での人的ネットワークの形成	100.0%
学校変革 試行実習 (2年次)	現任校の課題に即した組織づくりの能力	100.0%
	計画を立てて改革を進める能力	100.0%
	現任校の課題に即した問題解決能力	100.0%
	実践の中で、問題の構造への理解を深めていく能力	100.0%
	リサーチプランを立てて、研究を実施する能力	100.0%
	スクールリーダーとしての教育実践力・指導力	100.0%

続いて、各コースの目標設定確認科目・目標達成確認科目の評価を示したものが、表 3-13 (授業実践・現職)、表 3-14 (授業実践・ストマス)、表 3-15 (子ども支援・現職)、表 3-16 (子ども支援・ストマス)、表 3-17 (教育経営) である。ここでも、肯定の割合のみを示している。

表 3-13 授業実践コース (現職) の目標設定確認科目・目標達成確認科目の評価 (N=2)

実習	項目	肯定の割合 (全体)
目標設定 確認科目	現任校の課題を発見・分析する能力	100.0%
	授業に関わる理論研究と、現任校の課題を結びつける能力	100.0%
	自らの授業に関わる課題に対する改善策を立案する能力	100.0%
	達成目標を設定し、客観的な資料やデータを収集する能力	100.0%
目標達成 確認科目	授業に関わる研究課題に応じた授業改善を行う能力	100.0%
	自己の授業改善の実践について、理論と実践の往還によって考察を深める能力	100.0%
	自己の授業実践を評価することができる能力	100.0%

表 3-14 授業実践コース（ストマス）の目標設定確認科目・目標達成確認科目の評価（N=9）

実習	項目	肯定の割合 (全体)
目標設定 確認科目	自らの課題を発見・分析する能力	100.0%
	理論研究と、自らの課題を結びつける能力	88.9%
	課題に対する改善策を立案する能力	100.0%
	達成目標を設定し、客観的な資料やデータを収集する能力	100.0%
目標達成 確認科目	自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力	88.9%
	自らの課題に対する改善の実践を、理論と実践の往還を通じて相対化する能力	88.9%
	自己の教育実践を振り返ることができる能力	100.0%

「授業実践」に関する表 3-13 及び表 3-14 をみると、総じて、目標設定や目標達成に関する科目の評価が高いことがうかがえる。しかし、表 3-14 における一部のストマスの評価では、目標設定において理論研究と課題を結びつける能力やリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力、実践を相対化する能力に関して課題があることが分かる。

「子ども支援」及び、「教育経営」に関する表 3-15 から表 3-17 についても、総じて、目標設定や目標達成に関する科目の評価が高いことがうかがえる。しかし、「子ども支援」の現職（表 3-15）における評価では、理論研究と現任校の課題を結びつける能力、学校改善の過程を構造（調査票のママ）して捉える能力に関して課題があることがわかる。この2項目は昨年度調査でも課題として挙がっていた。大学院で学んだ理論をどのように学校課題の解決に繋げていけるのかということ、ゼミや個別指導の中で議論し、少しずつ形にするという機会を提供していきたい。

表 3-15 子ども支援コース（現職）の目標設定確認科目・目標達成確認科目の評価（N=3）

実習	項目	肯定の割合 (全体)
目標設定 確認科目	授業に関わる理論研究と、現任校の課題を結びつける能力	100.0%
	理論研究と、現任校の課題を結びつける能力	66.7%
	課題に対する改善策を立案する能力	100.0%
	学校改善の過程を構造して捉える能力	66.7%
目標達成 確認科目	自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力	100.0%
	自己の学校改善の実践を、理論と実践の往還を通じて相対化する能力	100.0%
	自己の教育実践を振り返ることができる能力	100.0%

表 3-16 子ども支援コース（ストマス）の目標設定確認科目・目標達成確認科目の評価（N=1）

実習	項目	肯定の割合 (全体)
目標設定 確認科目	自らの課題を発見・分析する能力	100.0%
	理論研究と、自らの課題を結びつける能力	100.0%
	課題に対する改善策を立案する能力	100.0%
	達成目標を設定し、客観的な資料やデータを収集する能力	100.0%
目標達成 確認科目	自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力	100.0%
	自らの課題に対する改善の実践を、理論と実践の往還を通じて相対化する能力	100.0%
	自己の教育実践を振り返ることができる能力	100.0%

「教育経営」は、すべての項目で肯定の割合が100%であった（表 3-17）。昨年度調査では「目標設定確認科目」における「課題に対する改善策を立案する能力」、「自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力」、「自己の学校改善の実践を、理論と実践の往還を通じて相対化する能力」の3項目についてのみ肯定の割合が80%であり、あとは100%であった。ただし、実習科目の箇所でも述べたが、教育経営コースの学生は1学年5名であるため、この回答の差は1名の回答傾向の違いによるものであるため、前年度・今年度とも概ね良好な結果であると言える。

表 3-17 教育経営コース（現職）の目標設定確認科目・目標達成確認科目の評価（N=5）

実習	項目	肯定の割合 (全体)
目標設定 確認科目	現任校の課題を発見・分析する能力	100.0%
	理論研究と、現任校の課題を結びつける能力	100.0%
	課題に対する改善策を立案する能力	100.0%
	学校改善の過程を構造して捉える能力	100.0%
目標達成 確認科目	自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力	100.0%
	自己の学校改善の実践を、理論と実践の往還を通じて相対化する能力	100.0%
	自己の教育実践を振り返ることができる能力	100.0%

(3) 自由記述の結果

ここでは、修了生調査の自由記述の結果をコースごとに掲載する。枠内の記述のうち、一重線は学習の「成果」を示すもの、点線は現在の「悩み」を、二重線は教職大学院の「課題」を示すものであ

る。なお、明らかな誤字や脱字は修正し、個人が特定されるような表現は削除するなどのアレンジを加えている。

まず、「授業実践」の自由記述を見ていく。学習の成果（一重線）をみると、教育現場で起きる現実的な課題を理解したり、教育について実践レベルで学んだりした教職大学院での経験が、実際の生徒指導や保護者対応時の冷静な判断や対応につながっていることが読み取れる。そのことは、「2年間の学びは確実に現場での実践に役立っている」という記述に表われている。また、採用試験対策への感謝も述べられている。

悩みとしては、多忙さから思うように理論研究からの授業づくりが実践できないことがあげられている。学校現場で実践研究を続けるきっかけとなる関わりをつくっていけないか、大学院としては、修了生のフォローアップともなる関わりを今後検討していく必要がある。

教職大学院の課題（二重線）としては、コロナ禍で異学年の院生同士の関わりができなかったことが挙げられている。この状況は今後も続くことが考えられることから、従来とは異なる院生同士の関わりを深める環境づくりについて早急に検討・対応する必要がある。また、ストマスについては、修了前に学校現場について質問・相談できる機会が欲しかったという記述がある。現職院生の力を借りて、今後実現させることができればと考える。

院生室が、コロナ禍の状況で2年次ほぼ使えなくて残念に思いました。もう少し、異学年の院生同士のつながりができればよかったと思います。（現職）

1年目にコロナの影響を受けず学内で学べたことは、大変意義のあることだった。やはり対面での講義や実習に勝るものはない。今後入ってこられる院生の皆さんにも、できるだけ多く、通常と同等の機会が与えられることを願っている。2年間の学びは、確実に現場での実践に役立っている。現場で行き詰ったとき、大学院で学んだ資料や文献に立ち戻ることも多い。多くのことを経験させていただいたことに心から感謝している。（現職）

学部生までの講義では知ることがなかった、教育現場におけるさまざまな現実的課題について知ることができたことは、現場に出て諸問題に直面した際に、焦ったり驚いたりすることなく冷静に判断・対応できるようになったことに繋がったと思います。具体的には、生徒間で問題が起きた際の生徒対応・指導や保護者対応、不登校の生徒や配慮が必要な生徒への対応などです。また、教育について実践レベルで学べたことや、採用試験対策をして頂けたことで、採用試験にも合格できたと感謝しています。現場に出て感じたことは、学級経営案や教科等の年間計画など、基本的な事務に関わる知識が不足しているという点でした。2年次は感染症の拡大もあり、現職院生や修了生との交流の機会がほとんどありませんでしたが、修了前に、現場について質問・相談できる機会がもう少しあれば良かったなと思います。また、理論研究の視点から授業づくりを行う大切さは十分理解しているものの、多忙さから思うように実践できていない状況が続き、罪悪感や不甲斐なさを感じています。この点については、先輩の先生方にご指導頂きながら、また経験しながら、改善を繰り返していきたいと思います。（中略）毎日多くの学びを得ながら働くことができる楽しさを感じています。大学院で学んだこと全てが生かしているわけではありませんが、少しでも「知っている」ということを武器に、今後も日々の実践や対応を行っていききたいと思います。（ストマス）

次に、「子ども支援」の自由記述の結果をみていく。学習の成果（一重線）をみると、学校現場から離れて見えてきたことや、多様な専門性を持った教員や異なる校種の院生との交流により、よい刺激を受けていたことが伺える。そして、大学院での学びが学校に戻った際に役立っているということが実感として報告されている。

悩み（点線）としては、大学院在学中にコロナ禍があったことにより、実習や実践研究で消化不良なところがあったことが挙げられている。大変な状況の中で院生も教員もできることを模索して取り組んだが、もし何もなければもっと多くのことに取り組めたのではないかという気持ちは拭えないのであろう。

教職大学院の課題（二重線）としては、対面指導が制限された中での大学院のあり方、特別支援教育の専修免許、科目選択の自由度、修了後の大学院とのつながりなどが挙げられていた。このうち特別支援教育の専修免許に関しては、5期生から子ども支援コース特別支援教育系において取得できるようになったというのが事実であり、本調査が対象としている4期生は、たとえ本大学院を修了したとしても特別支援教育の専修免許状は取得できない、という制度上の制約があったということは付言しておく。また修了後のつながりについては、研究成果発表会への招待や大学院紀要への投稿を呼びかけるなど、つながりを保つシステムを模索している。

在学中のご指導が今とても役立っている実感があり感謝しています。年に1回でも公式（出張扱い）な報告会や研修会があれば、現状の俯瞰的な視点と自身の実践を真摯に振り返る機会の継続に繋がるのではないかと考えています。ご検討いただけたら有難いです。（現職）

教職大学院での2年間の学びは、私にとってたいへん意義のあるものでした。学校現場を離れることで新たに増えてきたこともあります。様々な校種の先生方やストレートマスターの皆さんの意見を聞くことも新鮮でよかったです。「こうしたい」「こうなりたい」という思いがそれぞれの方にあり、勉強になりました。しかし、私の場合、自分の中で何をどのように変革していきたいのかというビジョンがあいまいなまま大学院に入学してしまったため、方向性を明らかにするまでに時間がかかりすぎてしまいました。担当の先生方にはご心配をおかけしてばかりで申し訳なく思っています。また、1年目終盤から2年目にかけてはコロナの影響で、大学構内に入ることもままならない状況の中、先生方とお会いできる機会も制限され、ほかの院生とのコミュニケーションも取れない中で進める研究は孤独と不安でいっぱいでした。振り返ってみると、得たものも多くありましたが、悔やまれることも多くあり、できることならば、あの2年間をもう一度やり直したいと思っています。1年次の授業について、また、2年次の授業について、実習について、後悔することがたくさんあります。研究も中途半端なまま終わってしまいました。今回のアンケート回答で「4」に多くチェックが入ったのは、そういう後悔の念や未だにある自分の自信のなさが表れている結果だと思います。とりとめもないことを書いてしまいました。申し訳ありません。最後に、私は特別支援教育について研究をしてきましたが、大学院卒業に際して頂ける免許が英語の専修免許、というのに違和感を感じました。（現職）

必須教科等の兼ね合いもあると思うが、「ねばならない」よりも、もう少し自由度が高ければ良かったと感じます。（現職）

さらに、「教育経営」の自由記述の結果をみていく。学習の成果（一重線）としては、教育経営に関

して大学院で学んだ概念を日常の業務の中でも意識でき、学校改善への志向性が高まっていることがうかがえる。教職大学院への要望（二重線）として、修了後も意見交換ができる場や、学校での ICT 利活用教育に関する実践的講義を行うことが挙げられていた

教職大学院で学んだことで、目の前の見え方が変化しています。私は、①学校課題、②協働、③組織、④リーダーシップ、⑤改善プロセス、⑥働きやすさ、を日常で意識するようになっています。逆に、他分掌の強引なやり方や組織的問題も目につくようになりました。大学院修了後は、分掌主任の立場を活かして、業務の取捨選択も含め、業務改善をいくつか行っています。このように自分の意識と行動が学校改善に向かっています。

教職大学院に対して望むことは、修了生がホームカミングデーのように、大学院の先生方から復習講義を受けたり、最新の情報を得ながら意見交換ができる場があればと思います。

ICT 利活用教育については、タブレットや電子黒板、学校でのオンライン授業で使い方をもっと勉強したかったです。GIGA スクールが始まって、多くの教員が戸惑っているのは、使えないということです。講義を聞くだけでなく、PC やタブレットを用いて実技や体験活動があると大変良かったと思います。

4. 調査結果の考察

(1) 本調査から得られた知見

① 修了生と管理職の認識の異同－*t* 検定の結果から－

ここまで、修了生に対する管理職の評価や、修了生自身の評価の特徴をみてきた。これに加えて、上述した管理職から見た修了生の評価と、修了生自身が考える成果の項目について、「全くそう思わない」を1、「あまりそう思わない」を2、「どちらとも言えない」を3、「ややそう思う」を4、「とてもそう思う」を5と数値化し、各項目の平均と標準偏差（SD）を算出した。そして管理職と修了生の得点に差が見られるかを検討するために、対応のある *t* 検定を行なった。分析の結果、有意差が見られたところは黄色で示している。

まず、現職の修了生と管理職との比較をしたものが表 4-1（現職・管理職）である。*t* 検定の結果、「1 学校全体の視野で、物事を見ることができている」、「3 学校を『組織』として見ることができている」の項目において有意差が見られ、いずれも現職修了生の評価が管理職の評価よりも高いことが明らかとなった。その他の項目では有意差が見られず、現職修了生と管理職の評価にズレがないことが示された。有意差の見られた2項目についても、現職修了生の方が高く評価しているとはいえ、管理職からも5点中4.30、4.20という肯定的な評価を受けているため、実態とかけ離れた過度に楽観的な評価をしているわけではないといえる。そして多くの項目で現職修了生、管理職の平均が4点を超えていることは、大学院の学びの成果として肯定的に捉えることができる。

表 4-1 管理職の評価と現職修了生の自己評価の比較（管理職・現職修了生ともに N=10）

番号	項目	現職の平均 (SD)	管理職の平均 (SD)	t 値
1	学校全体の視野で、物事を見ることができている	4.80 (0.42)	4.30 (0.67)	3.00*
2	社会との関係性の中で、学校のことを考えられている	4.50 (0.52)	4.20 (0.63)	ns
3	学校を「組織」として見ることができている	4.80 (0.42)	4.20 (0.63)	3.67**
4	物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができている	4.60 (0.52)	4.50 (0.71)	ns
5	学校教育目標の実現に向けて、短期的・長期的視野で考えて取り組むことができている	4.30 (0.48)	4.40 (0.70)	ns
6	様々な企画・立案を行い、学校運営に積極的に貢献できている	4.10 (1.00)	4.40 (0.70)	ns
7	学校が抱える教育課題の改善に向けて、課題意識を持って主体的に取り組んでいる	4.50 (0.71)	4.30 (0.67)	ns
8	学校や地域、児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成できている	3.70 (1.16)	4.00 (0.67)	ns
9	同僚教員との協働関係に気を配れている	4.70 (0.48)	4.40 (0.84)	ns
10	若手(自分より年齢が下の)教員に対する指導力・助言力が高い	4.10 (0.74)	4.40 (0.84)	ns
11	ベテラン教員に配慮できている	4.20 (0.79)	4.40 (0.70)	ns
12	管理職と教員間をつなぐ役割を果たすことができている	3.90 (0.99)	4.00 (0.82)	ns
13	校務分掌で、リーダーシップを発揮できている	4.00 (0.94)	4.60 (0.70)	ns
14	学年集団で、リーダーシップを発揮できている	3.67 (1.00)	4.33 (0.71)	ns
15	学級集団づくりに積極的に取り組むことができている	4.00 (0.87)	4.00 (0.71)	ns
16	校内研究や研修等において、リーダーシップを発揮できている	4.20 (1.03)	4.40 (0.70)	ns
17	様々な場面で、スクールリーダーとしての自覚が高い	4.00 (0.67)	4.30 (0.82)	ns
18	生徒指導や教育相談等において、高い専門的知識と実践力を発揮できている	3.90 (0.73)	4.00 (0.67)	ns
19	児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている	4.80 (0.42)	4.50 (0.71)	ns
20	教材研究や事例研究を積極的に行うことができている	4.60 (0.52)	4.80 (0.63)	ns
21	教科・学習指導において、貢献できる部分大きい	4.20 (0.92)	4.60 (0.70)	ns
22	積極的に授業開発に臨んでいる	4.40 (0.70)	4.70 (0.67)	ns
23	学習成果を的確に把握するため、学習評価にも工夫を加えている	4.40 (0.70)	4.10 (0.58)	ns
24	実践を振り返り、指導力向上に努めている	4.50 (0.52)	4.50 (0.71)	ns
25	研修会での講師を任されるなど、学校外でも貢献できている	3.70 (0.82)	4.10 (0.99)	ns
26	地域との関係づくりに積極的である	3.50 (1.08)	3.70 (0.48)	ns
27	様々な保護者に対応する能力が高い	3.90 (0.32)	4.10 (0.87)	ns
30	全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている	4.60 (0.70)	4.60 (0.70)	ns

注1) ** $p < .01$, * $p < .05$, ns (not significance)

注2) 28, 29の項目は管理職には調査を行っていない。

次に、ストマス修了生と管理職との比較をしたものが、表 4-2（ストマス・管理職）である。 t 検定の結果、「1 社会との関係性の中で、学級や学年のことを考えている」、「12 教科・学習指導において、貢献できている」の項目において有意差が見られ、項目 1 については、ストマス修了生の得点が管理職の得点よりも高く、項目 12 については逆に管理職の得点がストマス修了生の得点よりも高いことが明らかとなった。ストマス修了生は教師 1 年目であるため、評価の基準となる過去の経験がなく、

評価を高くつけたり、あるいは自身の働きを過度に低くつけたりする場合があります、そのことが管理職の得点とのズレとして現れたのではないかと考えられる。しかし、その他の項目については有意差が見られず、上記の現職修了生と同様、大学院での学びの成果をある程度客観的に捉えられているといえることができるだろう。管理職からの評価は2.80～4.50と幅広いが、4点以上の項目が20項目中9項目あり、初任ということを考えてある程度の評価を受けていると肯定的に捉えることができる。

表 4-2 管理職の評価とストマス修了生の自己評価の比較（管理職・ストマス修了生ともに N=10）

番号	項目	ストマスの平均 (SD)	管理職の平均 (SD)	t 値
1	社会との関係性の中で、学級や学年のことを考えている	4.40 (0.69)	3.70 (0.67)	2.33*
2	学級や学年を学校の「組織」として見るができている	4.20 (0.92)	3.90 (0.86)	ns
3	物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができている	3.90 (0.57)	3.80 (1.13)	ns
4	同僚教員との協働関係に気を配ることができている	4.30 (0.67)	4.20 (0.63)	ns
5	ベテラン教員に配慮できている	4.20 (0.79)	4.20 (0.63)	ns
6	校務分掌で自分の役割を積極的に果たしている	3.70 (0.95)	3.80 (1.03)	ns
7	学年集団で自分の役割を積極的に果たしている	4.30 (0.82)	4.20 (1.03)	ns
8	学級集団づくりに積極的に取り組んでいる	4.30 (0.48)	4.50 (0.71)	ns
9	生徒指導や教育相談等において、専門的知識と実践力を発揮できている	3.80 (0.92)	3.50 (0.97)	ns
10	児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている	4.60 (0.52)	4.10 (0.99)	ns
11	教材研究や事例研究を積極的に行っている	4.10 (0.57)	4.10 (0.70)	ns
12	教科・学習指導において、貢献できている	3.60 (1.07)	4.40 (0.70)	2.75*
13	積極的に授業開発に臨んでいる	4.20 (0.63)	4.30 (0.82)	ns
14	学習成果を的確に把握するため、学習評価にも工夫を加えている	3.50 (0.97)	3.60 (0.97)	ns
15	実践を振り返り、指導力向上に努めている	4.20 (0.79)	4.30 (0.95)	ns
16	地域との関係づくりが積極的にできている	2.60 (0.84)	2.80 (0.63)	ns
17	様々な保護者に対応できている	3.60 (1.17)	3.50 (0.97)	ns
18	学会発表や論文の公表など、学校教育の発展に資する研究活動ができている	2.20 (1.22)	2.90 (0.57)	ns
19	研修などの自己研鑽の機会を活かし、積極的に学んでいる	4.00 (0.82)	3.90 (0.57)	ns
20	全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている	4.30 (0.67)	3.80 (0.92)	ns

注) ** $p < .01$, * $p < .05$, ns (not significance)

② プログラム上の課題と改善方策

本大学院のプログラムは全コース共通の授業もあればコースごとの授業もあるため、コースごとの課題については上述の該当箇所を参照されたい。ここでは、本大学院全体に関わるプログラム上の改善課題として析出されたもののうち、次の3点について改善方策を検討してみたい。

第一に、昨年度報告書でも指摘したが、特にストマスを中心に学級経営上の課題への対応方法に関する指導のニーズが高い点である。この点については、昨年度の調査結果を受けて既に各教員の授業の中で、なるべく学級経営上の配慮事項に言及するよう努めている。例えば「教職キャリアデザイン」の基礎と課題では、授業1回分を使って学級経営上の課題を検討対象としているし、タイトルに「学

級経営」を含む「授業づくりと学級経営の基礎と課題」においても、学級経営の状況分析や問題把握、及びその対策といった学級経営上の課題解決方策について学修する機会を設けるようにしている。いずれにせよ、本調査が対象とした4期生はそうした授業を受けていないため、このような改善策の効果が調査結果として現れるのは現在の修士1年生が修了生となる令和5（2023）年度調査まで待たなければならない。他方で、より抜本的なカリキュラム改訂を視野にいたした改善方策の検討も必要であろう。例えば、上述の授業はすべて全コース共通の授業科目であるが、ストマスほとんどが「授業実践」であることに鑑みると、「授業実践」のコース科目として学級経営に特化した授業を設置することも一考に値する。例えば、本大学院にはいわゆる「みなし専任」の非常勤准教授の実務家教員（週3日は現任校で勤務し、週2日は本大学院で勤務する教員）が3名いるが、その3名がまさに現在学校で発生している学級経営上の諸課題についての授業を担当するなど、新たな授業を立ち上げるということも有効だろう。今後の検討課題としたい。

第二に、より具体的かつ効果的な授業でのICTの利活用に関する方策を求める声は、ストマス・現職双方から聞かれる。本大学院においては、発足当初より「教科等におけるICTの利活用の基礎と課題」という授業が共通科目として設定されており、これが本大学院においてICTの利活用能力の修得を直接の授業目的とする唯一の授業科目であるが、その内容を再検討し、刷新する必要性が指摘できよう。

第三に、卒後支援の必要性である。この視点は選択肢回答に対する質問項目には盛り込まれておらず、自由記述回答において言及されたものではあるが、特にストマスにとっては、学部新卒の新採教員に比べるとより高度な能力をもって現場に赴いていることが想定あるいは期待はされるものの、他方でいくら教職大学院で2年間学び、一定の長期間実習に取り組んだとはいえ、採用後に見る学校の風景は未知の世界のそれであろう。教職大学院の教員が言うべきセリフではないかもしれないが、彼らが学校で直面する事象は、学部・大学院で学んだことをはるかに超えた多様性と複雑性を有するものである。初任者が経験するそうした困難を乗り越える術を現場レベルで獲得する機会として、「初任者研修」が教育委員会によって準備はされている。それはそれで重要であるし、効果もあるであろう。他方で、学校現場からは一定程度距離を置き、冷静に学校での様々な事象を検討している研究者の目から見たとき、そうした事象はどのように映るのか、多様な現場経験を持ちつつ初任者の総数よりはるかに規模が小さいため一人ひとりの個性を把握したうえで具体的なアドバイスをし得る実務家教員の目にはどう映るのか、大学院で学んだ「理論と実践の往還」をまさに「実践」するためにも、大学院修了から一定期間経った後に卒後支援活動を設定することは、有益であろう。またそれは、教職大学院で体系的に様々な課題を学び、修了後それを大学院就学前の経験と効果的に混合しながらより高度な実践を志向する現職の修了生が、再び日々の多忙な職務に埋没することを防ぎ、常に「理論と実践の往還」に留意することを促す、良い機会ともなろう。今後の検討課題としたい。

(2) 調査方法における課題

本稿冒頭では、昨年度調査に見られた調査方法上の課題として次の4点を上げた。即ち、①調査対象と質問項目の整合性の問題（現職教員院生（以下「現職」）とストレートマスター（以下「ストマス」）に対して同じ調査票を用いたこと）、②調査方法上の課題（量的調査と併せてインタビューなど質的調査を併せて行い、より深い考察を行っていくこと）、③分析結果を本大学院の統一性と各コースの独自性のバランスの中でどのように活かしていくか、④データ収集方法に内在するデータの信憑性・妥当性の問題（高い回収率と回答者の匿名性の両立）、の4点である。

今年度調査においては①と④について改善策を講じたが、その目的は一定程度達せられたと認識している。ただし、Google Forms を使って調査を実施した点については、通信環境の関係もあり、調査対象者の中にはそもそもアクセスに制約がある場合や URL が途切れてしまう場合なども見られた。つまり、回収率と匿名性を両立させるために Google Forms を用いたこと自体は正解であったと言えるだろうが、そこでの技術的な問題が新たに発生したということも指摘しておかなければならない。また、オンライン調査だと自由記述での量が少なくなるのではないかという懸念も見られた。次年度調査においては、これら技術的な課題については Google Forms の解説を付ける、Q&A 方式の対処法マニュアルを作成するなどの対応を検討したい。

②と③に関しては、本調査においても引き続き検討課題として指摘できるだろう。③に関しては、前項でも述べたプログラム上の課題の改善方策を検討する際の一つの視点を提示するものである。前項で述べた改善策を具体化する際に、検討したいと思う。②のミックスメソッドの採用については、本調査結果を本大学院全体で検討したうえで、インタビュー調査等の質的調査を実施する時期として次年度が相応しいのか、あるいはもう一回量的調査で全体的な傾向性を把握した方がよいのか、判断したいと思う。また、その他アンケート調査における質問事項の細かな用語法についても、より正確に調査対象者の認識を問えるようなものとするよう、継続して吟味することが必要であろう。

(2022 年 1 月 28 日 受理)

資料1 管理職調査の依頼書

2021年10月28日

所属長 各位

佐賀大学大学院学校教育学研究科（教職大学院）令和2年度修了生
（授業実践探究コース）追跡アンケート調査ご協力をお願い

佐賀大学大学院学校教育学研究科
教育実践探究専攻長 平田 淳

前略

平素より本教職大学院の運営にご協力頂きまして、誠にありがとうございます。令和3年3月に教職大学院第4期生が修了しまして、早半年が過ぎました。2年間大学院で研究したことを現場でどのように活かしているのか、指導に当たった者として期待と不安が入り混じった複雑な心境ではありますが、きっと貴校にとって何らかのお役には立てているのではないかと、希望的観測ながら思っております。

さてこの度、実際に修了生が教職大学院で学んだことをどのように、またどの程度活かしているのかについて、修了生本人及び修了生が所属する所属長様を対象に追跡アンケート調査を実施することとなりました。先生方には是非ご協力いただき、ご意見をお聞かせください。今後の教職大学院の運営に大いに活用させていただきたく存じます。なお、修了生には別途直接アンケート調査を行うようにしています。

調査につきましては、次のような形式で行うこととしております。

- 令和2年度修了生（この3月の修了生）についてお伺いします。
- 調査は「Google フォーム」を使って実施します。次の URL にアクセスし、オンラインで回答し、提出してください。URL：この部分は、所属コース・回答者の属性ごとに異なるため割愛。
- 質問項目は選択肢方式と自由記述方式の双方を用いています。
- 調査自体へのご協力は完全に任意です。お気が進まない場合はご協力を辞退なさっても結構です。
- 「調査自体への協力は構わないが、特定の設問には回答したくない」という場合、該当する設問は飛ばして回答を続けて頂いて構いません。
- このアンケートは、完全に匿名で行われます。
- アンケート結果を基に、追跡調査報告書を作成する（研究科紀要に掲載予定）計画ではありますが、使用するのはいくつかの傾向を表す数値データ及び匿名性を確保した形で提示する自由記述回答のみです。報告書の記述から個人・学校等が特定されることはありません。
- ご回答やデータは、研究・教育目的にのみ使用いたします。その他の目的に利用することはありません。また、データは報告書作成時から一定期間（約5年間）保管した後に廃棄いたします。
- アンケートは、令和3年11月19日（金）までに回答してください。

アンケート調査は無記名で行われますが、そのままだと未回答者への回答督促ができず、結果として回収率が低くなる可能性があります。そのため、回答された方は速やかに下記担当教員までその旨メールでお知らせください。

以上、本教職大学院をより良いものとし、佐賀県の教育の発展に微力ながら尽力するための基礎となるデータ収集ですので、お忙しい中大変恐縮ですが、ご協力賜りたく存じます。

草々

記

○ アンケート調査用紙返信締め切り

令和3年11月19日（金）

○ 担当教員・メールアドレス

コースごとに異なるため、割愛。

以上

資料2 管理職調査の調査票（現職／授業実践・子ども支援・教育経営共通）

1. 令和2年度修了生について、どのように思われますか？	
「5 とてもそう思う」「4 ややそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	学校全体の視野で、物事を見ることができている
2	社会との関係性の中で、学校のことを考えられている
3	学校を「組織」として見ることができている
4	物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができている
5	学校教育目標の実現に向けて、短期的・長期的視野で考えて取り組むことができている
6	様々な企画・立案を行い、学校運営に積極的に貢献できている
7	学校が抱える教育課題の改善に向けて、課題意識を持って主体的に取り組んでいる
8	学校や地域、児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成できている
9	同僚教員との協働関係に気を配ることができている
10	若手（自分より年齢が下の）教員に対する指導力・助言力が高い
11	ベテラン教員に配慮できている
12	管理職と教員間をつなぐ役割を果たすことができている
13	校務分掌で、リーダーシップを発揮できている
14	学年集団で、リーダーシップを発揮できている
15	学級集団づくりに積極的に取り組んでいる
16	校内研究や研修等において、リーダーシップを発揮できている
17	様々な場面で、スクールリーダーとしての自覚が高い
18	生徒指導や教育相談等において、高い専門的知識と実践力を発揮できている
19	児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている
20	教材研究や事例研究を積極的に行っている
21	教科・学習指導において、貢献できている
22	積極的に授業開発に臨んでいる
23	学習成果を的確に把握するため、学習評価にも工夫を加えている
24	実践を振り返り、指導力向上に努めている
25	研修会での講師を任されるなど、学校外でも貢献できている
26	地域との関係づくりが積極的に行っている
27	様々な保護者に対応できている
28	全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている

2. 今後、修了生に期待できる役割は何ですか？	
「5 とてもそう思う」「4 ややそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	学校改善に向けてリーダーシップを発揮すること
2	学年団、校務分掌等学校の組織化（マネジメントの強化）においてリーダーシップを発揮すること
3	教員間の協働体制の強化においてリーダーシップを発揮すること
4	生徒指導においてリーダーシップを発揮すること
5	授業改善に向けてリーダーシップを発揮すること
6	学習評価においてリーダーシップを発揮すること
7	管理職と教員をつなぐミドルリーダーになること
8	主幹教諭・指導教諭になること
9	校長・副校長・教頭になること
10	学校以外の機関の職に就くこと（教育委員会や児童相談所など）
11	学校と地域との関係づくりにリーダーシップを発揮すること
12	学校と保護者との関係づくりにリーダーシップを発揮すること
13	学校外部の組織・機関との連携においてリーダーシップを発揮すること

3. 今後、佐賀大学の教職大学院に望むことは何ですか？	
「5 とても強く望む」「4 少し望む」「3 どちらとも言えない」「2 あまり望まない」「1 全く望まない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	大学院生を送り出している管理職とのコミュニケーション
2	実習中の現職学生へのより積極的なサポート
3	大学院生ではない教員の研修（教育センター等）への参加
4	校長に対する学校運営上の助言
5	教育委員会に対する政策提言
6	研修会等における講師や研究会での発表や指導助言
7	学校との共同研究

4. その他、教職大学院に対する意見がありましたら、自由にご記入ください。

資料3 管理職調査の調査票（ストマス／授業実践・子ども支援コース共通）

1. 令和2年度修了生について、どのように思われますか？	
「5 とてもそう思う」「4 ややそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	社会との関係性の中で、学級や学年のことを考えている
2	学級や学年を学校の「組織」として見ることができている
3	物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができている
4	同僚教員との協働関係に気を配ることができている
5	ベテラン教員に配慮できている
6	校務分掌で自分の役割を積極的に果たしている
7	学年集団で自分の役割を積極的に果たしている
8	学級集団づくりに積極的に取り組んでいる
9	生徒指導や教育相談等において、専門的知識と実践力を発揮できている
10	児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている
11	教材研究や事例研究を積極的に行っている
12	教科・学習指導において、貢献できている
13	積極的に授業開発に臨んでいる
14	学習成果を的確に把握するため、学習評価にも工夫を加えている
15	実践を振り返り、指導力向上に努めている
16	地域との関係づくりが積極的に行っている
17	様々な保護者に対応できている
18	学会発表や論文の公表など、学校教育の発展に資する研究活動ができている
19	研修などの自己研鑽の機会を活かし、積極的に学んでいる
20	全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている

2. 今後、修了生に期待できる役割は何ですか？	
「5 とてもそう思う」「4 ややそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1 教員間の協働体制の強化において積極的に関わること	
2 生徒指導において積極的に関わること	
3 授業改善に向けて積極的に関わること	
4 学習評価において積極的に関わること	
5 学校と地域との関係づくりに積極的に関わること	
6 学校と保護者との関係づくりに積極的に関わること	
7 学校外部の組織・機関との連携においてリーダーシップを発揮すること	

3. 今後、佐賀大学の教職大学院に望むことは何ですか？	
「5 とても強く望む」「4 少し望む」「3 どちらとも言えない」「2 あまり望まない」「1 全く望まない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1 大学院生を送り出している管理職とのコミュニケーション	
2 実習中の現職学生へのより積極的なサポート	
3 大学院生ではない教員の研修（教育センター等）への参加	
4 校長に対する学校運営上の助言	
5 教育委員会に対する政策提言	
6 研修会等における講師や研究会での発表や指導助言	
7 学校との共同研究	

4. その他、教職大学院に対する意見がありましたら、自由にご記入ください。

資料4 修了生調査の依頼書

2021年10月28日

佐賀大学大学院学校教育学研究科
（教職大学院）
第4期修了生 各位

修了生（〇〇コース）追跡アンケート調査ご協力をお願い

佐賀大学大学院学校教育学研究科
教育実践探究専攻長 平田 淳

前略

みなさんが佐賀大学教職大学院を修了されてから、早半年が過ぎました。現職院生だったみなさんは、きっとミドルリーダーとして学校等の中核を担い、ストマスだったみなさんは各校のヤングリーダーとして、それぞれご活躍のことと思います。

さてこの度、実際にみなさんが教職大学院で学んだことをどのように、またどの程度活かしているのかについて、追跡アンケート調査を実施することとなりました。みなさんには是非ご協力いただき、ご意見をお聞かせください。今後の教職大学院の運営に大いに活用させてほしいと思います。

調査につきましては、次のような形式で行うこととしております。

- 調査は「Google フォーム」を使って実施します。質問項目はコース・現職・ストマス別に作成していますので、次の URL にアクセスし、オンラインで回答し、提出してください。
URL：この部分は、所属コース・回答者の属性ごとに異なるため割愛。
- 質問項目は選択肢方式と自由記述方式の双方を用いています。
- 調査協力は完全に任意です。気が進まない場合は協力を辞退しても構いません。
- 「調査自体への協力は構わないが、特定の設問には回答したくない」あるいは「自分には当てはまらない」という場合、該当する設問は飛ばして回答を続けてもらって構いません。
- このアンケート調査は、完全に匿名で行われます。
- アンケート結果を基に、追跡調査報告書を作成する（研究科紀要に掲載予定）計画ではありますが、使用するのはいくつかの傾向を表す数値データ及び匿名性を確保した形で提示する自由記述回答のみです。報告書の記述から個人・学校等が特定されることはありません。
- ご回答やデータは、研究・教育目的にのみ使用いたします。その他の目的に利用することはありません。また、データは報告書作成時から一定期間（約5年間）保管した後に廃棄いたします。
- アンケートは、令和3年11月19日（金）までに回答してください。
- アンケート調査は無記名で行われますが、そのままだと未回答者への回答督促ができず、結果として回収率が低くなる可能性があります。そのため、回答された方は速やかに下記担当教員までその旨メールでお知らせください。

以上、本教職大学院をより良いものとし、佐賀県の教育の発展に微力ながら尽力するための基礎となるデータ収集ですので、お忙しい中大変恐縮ですが、ご協力をお願いします。

草々

記

- アンケート調査用紙返信締め切り
令和3年11月19日（金）
- 担当教員・メールアドレス
コースごとに異なるため、割愛。

以上

資料5 修了生調査の調査票（授業実践・現職）

1. 【共通必修科目】（基礎と課題）の成果を、現在、以下のそれぞれの分野において、どの程度活かしていますか？ ※共通必修科目とは、①「教育課程編成の基礎と課題」②「現代的な学力観と授業実践の基礎と課題」③「授業づくりと学級経営の基礎と課題」④「教科等におけるICT利活用の基礎と課題」⑤「子どもの学ぶ意欲の基礎と課題」⑥「生徒指導・学校カウンセリングの基礎と課題」⑦「特別支援教育の基礎と課題」⑧「教育経営の基礎と課題」⑨「地域と連携する学校づくりの基礎と課題」⑩「教職キャリアデザインの基礎と課題」を指します。 「5 十分に活かしている」「4 やや活かしている」「3 どちらとも言えない」「2 あまり活かしていない」「1 全く活かしていない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成
2	授業における実践的指導力の向上
3	教材開発能力の向上
4	教科等におけるICT利活用能力の向上
5	現代的な学力観や学力育成への対応
6	いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談
7	子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応
8	学級経営の実践的指導力の向上
9	学校経営に関する諸問題への対応
10	学校と地域との連携の推進
11	学校と保護者との連携の推進
12	自己のキャリアデザイン

2. 【授業実践探究コース専門科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？ ※専門科目とは、①「学力と学習評価の研究」②「授業実践の研究」③「授業実践指導法の開発」④「授業実践内容の開発」⑤「授業実践と学習評価の開発」⑥「授業実践と学習評価の省察」を指します。 「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	学力と学習評価について考察する力
2	授業を実践し目的に応じて分析する力
3	各教科の授業における指導力
4	各教科の内容について研究する力
5	それぞれの専門教科の教材と学習評価を 開発 する力
6	それぞれの専門教科の教材と学習評価を 省察 する力

3. 【実習科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？ 「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
(1) 「異校種実習」(1年次) について	
1	異校種の教育活動に対する理解
2	異校種における授業実践に対する理解
3	異校種における児童・生徒に対する理解
4	異校種における教師文化に対する理解
(2) 「学校変革試行実習」(2年次) について	
5	学校の課題について把握する能力
6	理論を活用して学校変革の計画を立てる能力
7	計画に即して授業研究を行う能力
8	授業研究の成果を活かして授業実践を行う能力

4. 【目標設定確認科目】【目標達成確認科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？ 「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
(1) 「教育実践課題研究Ⅰ」（【目標設定確認科目】）（1年次）について	
1 現任校の課題を発見・分析する能力	
2 授業に関わる理論研究と、現任校の課題を結びつける能力	
3 自らの授業に関わる課題に対する改善策を立案する能力	
4 達成目標を設定し、客観的な資料やデータを収集する能力	
(2) 「教育実践課題研究Ⅱ」（【目標達成確認科目】）（2年次）について	
5 授業に関わる研究課題に応じた授業改善を行う能力	
6 自己の授業改善の実践について、理論と実践の往還によって考察を深める能力	
7 自己の授業実践を評価することができる能力	

5. 教職大学院の【施設・設備】や【学生生活】について、それぞれの満足度を教えてください。 「5 とても満足している」「4 やや満足している」「3 どちらとも言えない」「2 あまり満足していない」「1 全く満足していない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1 各演習室などの学習環境	
2 院生共同研究室などの生活環境	
3 大学図書館および教職大学院図書コーナーに備え付けの資料	
4 教員チームによる学生指導	
5 現職院生やストレートマスターなどの様々な院生との交流	

6. 教職大学院で2年間学んだ成果を、以下のそれぞれの点に、どの程度感じますか？ 「5 とてもそう思う」「4 ややそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1 学校全体の視野で、物事を見ることができている	
2 社会との関係性の中で、学校のことを考えられている	
3 学校を「組織」として見ることができている	
4 物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができている	
5 学校教育目標の実現に向けて、短期的・長期的視野で考えて取り組むことができている	
6 様々な企画・立案を行い、学校運営に積極的に貢献できている	
7 学校が抱える教育課題の改善に向けて、課題意識を持って主体的に取り組んでいる	
8 学校や地域、児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成できている	
9 同僚教員との協働関係に気を配ることができている	
10 若手（自分より年齢が下の）教員に対する指導力・助言力が高い	
11 ベテラン教員に配慮できている	
12 管理職と教員間をつなぐ役割を果たすことができている	
13 校務分掌で、リーダーシップを発揮できている	
14 学年集団で、リーダーシップを発揮できている	
15 学級集団づくりに積極的に取り組んでいる	
16 校内研究や研修等において、リーダーシップを発揮できている	
17 様々な場面で、スクールリーダーとしての自覚が高い	
18 生徒指導や教育相談等において、高い専門的知識と実践力を発揮できている	
19 児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている	
20 教材研究や事例研究を積極的に行っている	
21 教科・学習指導において、貢献できている	
22 積極的に授業開発に臨んでいる	
23 学習成果を的確に把握するため、学習評価にも工夫を加えている	
24 実践を振り返り、指導力向上に努めている	
25 研修会での講師を任されるなど、学校外でも貢献できている	
26 地域との関係づくりが積極的にできている	
27 様々な保護者に対応できている	
28 学会発表や論文の公表など、学校教育の発展に資する研究活動ができている	
29 研修などの自己研鑽の機会を活かし、積極的に学んでいる	
30 全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている	

7. その他、教職大学院に対する意見がありましたら、自由にご記入ください。

資料6 修了生調査の調査票（子ども支援・現職）

1. 【共通必修科目】（基礎と課題）の成果を、現在、以下のそれぞれの分野において、どの程度活かしていますか？ ※共通必修科目とは、①「教育課程編成の基礎と課題」②「現代的な学力観と授業実践の基礎と課題」③「授業づくりと学級経営の基礎と課題」④「教科等におけるICT利活用の基礎と課題」⑤「子どもの学ぶ意欲の基礎と課題」⑥「生徒指導・学校カウンセリングの基礎と課題」⑦「特別支援教育の基礎と課題」⑧「教育経営の基礎と課題」⑨「地域と連携する学校づくりの基礎と課題」⑩「教職キャリアデザインの基礎と課題」を指します。 「5 十分に活かしている」「4 やや活かしている」「3 どちらとも言えない」「2 あまり活かしていない」「1 全く活かしていない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成
2	授業における実践的指導力の向上
3	教材開発能力の向上
4	教科等におけるICT利活用能力の向上
5	現代的な学力観や学力育成への対応
6	いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談
7	子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応
8	学級経営の実践的指導力の向上
9	学校経営に関する諸問題への対応
10	学校と地域との連携の推進
11	学校と保護者との連携の推進
12	自己のキャリアデザイン

2. 【子ども支援探究コース専門科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？ ※専門科目とは、①「児童福祉と教育」②「教育相談における見立てと手立て」③「子ども支援活動実践の開発・省察」④「発達障害を持つ子どもの理解と支援」⑤「心身の発達過程論」⑥「個が生きる集団づくりのための生徒指導」を指します。 「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	不登校やいじめなどに対して、複数の具体的なアプローチを考える力
2	児童生徒の学習意欲や態度について、心理学的な観点からの理解
3	発達障害のある児童生徒に対して、ニーズに応じて教室でできる複数の具体的なアプローチを考える力
4	自殺予防教育やストレスマネジメント教育などの心理教育を具体的に実践する力
5	地域における特別支援教育の相談機関や制度などについての理解
6	児童福祉のあり方、及び児童福祉と教育の関連性や連携のあり方に関する理解
7	生徒指導の機能を活用し、子どもに自己指導能力と社会的リテラシーを育成する力
8	子どもを対象とした知能、パーソナリティ、メンタルヘルスおよび学級集団に関するアセスメント手法を理解し、学校現場で活用できる力

3. 【実習科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？ 「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
(1) 「関係機関実習」(1年次) について	
1	関係機関（児童相談所、適応指導教室）の役割や職務に対する理解
2	関係機関（児童相談所、適応指導教室）の職務と学校の課題の関係性に対する理解
3	学校以外の組織の役割や運営方法に対する理解
4	学校外での人的ネットワークの形成
(2) 「学校変革試行実習」(2年次) について	
5	現任校の課題に即した組織づくりの能力
6	計画を立てて改革を進める能力
7	現任校の課題に即した問題解決能力
8	実践の中で、問題の構造への理解を深めていく能力
9	リサーチプランを立てて、研究を実施する能力
10	スクールリーダーとしての教育実践力・指導力

4. 【目標設定確認科目】【目標達成確認科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？	
「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
(1) 「教育実践課題研究Ⅰ」（【目標設定確認科目】）（1年次）について	
1	現任校の課題を発見・分析する能力
2	理論研究と、現任校の課題を結びつける能力
3	課題に対する改善策を立案する能力
4	学校改善の過程を構造して捉える能力
(2) 「教育実践課題研究Ⅱ」（【目標達成確認科目】）（2年次）について	
5	自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力
6	自己の学校改善の実践を、理論と実践の往還を通じて相対化する能力
7	自己の教育実践を振り返ることができる能力

5. 教職大学院の【施設・設備】や【学生生活】について、それぞれの満足度を教えてください。	
「5 とても満足している」「4 やや満足している」「3 どちらとも言えない」「2 あまり満足していない」「1 全く満足していない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	各演習室などの学習環境
2	院生共同研究室などの生活環境
3	大学図書館および教職大学院図書コーナーに備え付けの資料
4	教員チームによる学生指導
5	現職院生やストレートマスターなどの様々な院生との交流

6. 教職大学院で2年間学んだ成果を、以下のそれぞれの点に、どの程度感じますか？	
「5 とてもそう思う」「4 ややそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	学校全体の視野で、物事を見ることができている
2	社会との関係性の中で、学校のことを考えられている
3	学校を「組織」として見ることができている
4	物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができている
5	学校教育目標の実現に向けて、短期的・長期的視野で考えて取り組むことができている
6	様々な企画・立案を行い、学校運営に積極的に貢献できている
7	学校が抱える教育課題の改善に向けて、課題意識を持って主体的に取り組んでいる
8	学校や地域、児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成できている
9	同僚教員との協働関係に気を配ることができている
10	若手（自分より年齢が下の）教員に対する指導力・助言力が高い
11	ベテラン教員に配慮できている
12	管理職と教員間をつなぐ役割を果たすことができている
13	校務分掌で、リーダーシップを発揮できている
14	学年集団で、リーダーシップを発揮できている
15	学級集団づくりに積極的に取り組んでいる
16	校内研究や研修等において、リーダーシップを発揮できている
17	様々な場面で、スクールリーダーとしての自覚が高い
18	生徒指導や教育相談等において、高い専門的知識と実践力を発揮できている
19	児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている
20	教材研究や事例研究を積極的に行っている
21	教科・学習指導において、貢献できている
22	積極的に授業開発に臨んでいる
23	学習成果を的確に把握するため、学習評価にも工夫を加えている
24	実践を振り返り、指導力向上に努めている
25	研修会での講師を任されるなど、学校外でも貢献できている
26	地域との関係づくりが積極的にできている
27	様々な保護者に対応できている
28	学会発表や論文の公表など、学校教育の発展に資する研究活動ができている
29	研修などの自己研鑽の機会を活かし、積極的に学んでいる
30	全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている

7. その他、教職大学院に対する意見がありましたら、自由にご記入ください。	

資料7 修了生調査の調査票（教育経営・現職）

1. 【共通必修科目】（基礎と課題）の成果を、現在、以下のそれぞれの分野において、どの程度活かしていますか？ ※共通必修科目とは、①「教育課程編成の基礎と課題」②「現代的な学力観と授業実践の基礎と課題」③「授業づくりと学級経営の基礎と課題」④「教科等におけるICT利活用の基礎と課題」⑤「子どもの学ぶ意欲の基礎と課題」⑥「生徒指導・学校カウンセリングの基礎と課題」⑦「特別支援教育の基礎と課題」⑧「教育経営の基礎と課題」⑨「地域と連携する学校づくりの基礎と課題」⑩「教職キャリアデザインの基礎と課題」を指します。 「5 十分に活かしている」「4 やや活かしている」「3 どちらとも言えない」「2 あまり活かしていない」「1 全く活かしていない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成
2	授業における実践的指導力の向上
3	教材開発能力の向上
4	教科等におけるICT利活用能力の向上
5	現代的な学力観や学力育成への対応
6	いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談
7	子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応
8	学級経営の実践的指導力の向上
9	学校経営に関する諸問題への対応
10	学校と地域との連携の推進
11	学校と保護者との連携の推進
12	自己のキャリアデザイン
2. 【教育経営探究コース専門科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？ ※専門科目とは、①「学校組織論」②「学級・学校危機管理論」③「学校経営課題探究の方法論」④「地域教育経営課題探究の方法論」⑤「学校内外連携・協働論」⑥「教育経営改善の開発・省察を指します。 「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	学校を「組織」として捉える視点
2	現任校の諸課題を構造的に理解する能力
3	現任校における自分の位置付けを相対化できる能力
4	現任校の課題を解決するための組織づくりの方法
5	学校組織におけるリーダーシップの重要性
6	ミドルリーダーとして学校改善のために行動する能力
7	教職員の「協働」の重要性への理解
8	学校教育目標に関する短期的・長期的な視点
9	教員評価や学校評価など、自らの活動への評価に関する理解
10	地域や保護者との連携を推進する力
11	学校における危機管理能力
3. 【実習科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？ 「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
(1) 「関係機関実習」(1年次) について	
1	教育委員会の役割や職務に対する理解
2	教育委員会の職務と学校の課題の関係性に対する理解
3	学校以外の組織の役割や運営方法に対する理解
4	学校外での人的ネットワークの形成
(2) 「学校変革試行実習」(2年次) について	
5	現任校の課題に即した組織づくりの能力
6	計画を立てて改革を進める能力
7	現任校の課題に即した問題解決能力
8	実践の中で、問題の構造への理解を深めていく能力
9	リサーチプランを立てて、研究を実施する能力
10	スクールリーダーとしての教育実践力・指導力

4. 【目標設定確認科目】【目標達成確認科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？ 「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
(1) 「教育実践課題研究Ⅰ」（【目標設定確認科目】）（1年次）について	
1 現任校の課題を発見・分析する能力	
2 理論研究と、現任校の課題を結びつける能力	
3 課題に対する改善策を立案する能力	
4 学校改善の過程を構造して捉える能力	
(2) 「教育実践課題研究Ⅱ」（【目標達成確認科目】）（2年次）について	
5 自らの立てたリサーチクエスションへの答えを見出す能力	
6 自己の学校改善の実践を、理論と実践の往還を通じて相対化する能力	
7 自己の教育実践を振り返ることができる能力	

5. 教職大学院の【施設・設備】や【学生生活】について、それぞれの満足度を教えてください。 「5 とても満足している」「4 やや満足している」「3 どちらとも言えない」「2 あまり満足していない」「1 全く満足していない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1 各演習室などの学習環境	
2 院生共同研究室などの生活環境	
3 大学図書館および教職大学院図書コーナーに備え付けの資料	
4 教員チームによる学生指導	
5 現職院生やストレートマスターなどの様々な院生との交流	

6. 教職大学院で2年間学んだ成果を、以下のそれぞれの点に、どの程度感じますか？ 「5 とてもそう思う」「4 ややそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1 学校全体の視野で、物事を見ることができている	
2 社会との関係性の中で、学校のことを考えられている	
3 学校を「組織」として見ることができている	
4 物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができている	
5 学校教育目標の実現に向けて、短期的・長期的視野で考えて取り組むことができている	
6 様々な企画・立案を行い、学校運営に積極的に貢献できている	
7 学校が抱える教育課題の改善に向けて、課題意識を持って主体的に取り組んでいる	
8 学校や地域、児童・生徒の実態に応じた教育課程を編成できている	
9 同僚教員との協働関係に気を配ることができている	
10 若手（自分より年齢が下の）教員に対する指導力・助言力が高い	
11 ベテラン教員に配慮できている	
12 管理職と教員間をつなぐ役割を果たすことができている	
13 校務分掌で、リーダーシップを発揮できている	
14 学年集団で、リーダーシップを発揮できている	
15 学級集団づくりに積極的に取り組んでいる	
16 校内研究や研修等において、リーダーシップを発揮できている	
17 様々な場面で、スクールリーダーとしての自覚が高い	
18 生徒指導や教育相談等において、高い専門的知識と実践力を発揮できている	
19 児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている	
20 教材研究や事例研究を積極的に行っている	
21 教科・学習指導において、貢献できている	
22 積極的に授業開発に臨んでいる	
23 学習成果を的確に把握するため、学習評価にも工夫を加えている	
24 実践を振り返り、指導力向上に努めている	
25 研修会での講師を任されるなど、学校外でも貢献できている	
26 地域との関係づくりが積極的にできている	
27 様々な保護者に対応できている	
28 学会発表や論文の公表など、学校教育の発展に資する研究活動ができている	
29 研修などの自己研鑽の機会を活かし、積極的に学んでいる	
30 全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている	

7. その他、教職大学院に対する意見がありましたら、自由にご記入ください。	

資料8 修了生調査の調査票（授業実践・ストマス）

1. 【共通必修科目】（基礎と課題）の成果を、現在、以下のそれぞれの分野において、どの程度活かしていますか？ ※共通必修科目とは、①「教育課程編成の基礎と課題」②「現代的な学力観と授業実践の基礎と課題」③「授業づくりと学級経営の基礎と課題」④「教科等におけるICT利活用の基礎と課題」⑤「子どもの学ぶ意欲の基礎と課題」⑥「生徒指導・学校カウンセリングの基礎と課題」⑦「特別支援教育の基礎と課題」⑧「教育経営の基礎と課題」⑨「地域と連携する学校づくりの基礎と課題」⑩「教職キャリアデザインの基礎と課題」を指します。 「5 十分に活かしている」「4 やや活かしている」「3 どちらとも言えない」「2 あまり活かしていない」「1 全く活かしていない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成
2	授業における実践的指導力の向上
3	教材開発能力の向上
4	教科等におけるICT利活用能力の向上
5	現代的な学力観や学力育成への対応
6	いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談
7	子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応
8	学級経営の実践的指導力の向上
9	学校経営に関する諸問題への対応
10	学校と地域との連携の推進
11	学校と保護者との連携の推進
12	自己のキャリアデザイン
2. 【授業実践探究コース専門科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？ ※専門科目とは、①「学力と学習評価の研究」②「授業実践の研究」③「授業実践指導法の開発」④「授業実践内容の開発」⑤「授業実践と学習評価の開発」⑥「授業実践と学習評価の省察」を指します。 「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	学力と学習評価について考察する力
2	授業を実践し目的に応じて分析する力
3	各教科の授業における指導力
4	各教科の内容について研究する力
5	それぞれの専門教科の教材と学習評価を 開発 する力
6	それぞれの専門教科の教材と学習評価を 省察 する力
3. 【実習科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？ 「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
(1) 「基盤実習」（1年次）について	
1	教科等指導力
2	児童生徒とのコミュニケーション力
3	特別な配慮を要する児童生徒へのケア
4	学級経営力
(2) 「学校課題探究実習」（2年次）について	
5	教科等指導力
6	児童生徒とのコミュニケーション力
7	計画に即して授業研究を行う能力
8	授業研究の成果を活かして授業実践を行う能力

4. 【目標設定確認科目】【目標達成確認科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？ 「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
(1) 「教育実践課題研究Ⅰ」（【目標設定確認科目】）（1年次）について	
1 自らの課題を発見・分析する能力	
2 理論研究と、自らの課題を結びつける能力	
3 課題に対する改善策を立案する能力	
4 達成目標を設定し、客観的な資料やデータを収集する能力	
(2) 「教育実践課題研究Ⅱ」（【目標達成確認科目】）（2年次）について	
5 自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力	
6 自らの課題に対する改善の実践を、理論と実践の往還を通じて相対化する能力	
7 自己の教育実践を振り返ることができる能力	

5. 教職大学院の【施設・設備】や【学生生活】について、それぞれの満足度を教えてください。 「5 とても満足している」「4 やや満足している」「3 どちらとも言えない」「2 あまり満足していない」「1 全く満足していない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1 各演習室などの学習環境	
2 院生共同研究室などの生活環境	
3 大学図書館および教職大学院図書コーナーに備え付けの資料	
4 教員チームによる学生指導	
5 現職院生やストレートマスターなどの様々な院生との交流	

6. 教職大学院で2年間学んだ成果を、以下のそれぞれの点に、どの程度感じますか？ 「5 とてもそう思う」「4 ややそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1 社会との関係性の中で、学級や学年のことを考えている	
2 学級や学年を学校の「組織」として見ることができている	
3 物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができている	
4 同僚教員との協働関係に気を配ることができている	
5 ベテラン教員に配慮できている	
6 校務分掌で自分の役割を積極的に果たしている	
7 学年集団で自分の役割を積極的に果たしている	
8 学級集団づくりに積極的に取り組んでいる	
9 生徒指導や教育相談等において、専門的知識と実践力を発揮できている	
10 児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている	
11 教材研究や事例研究を積極的に行っている	
12 教科・学習指導において、貢献できている	
13 積極的に授業開発に臨んでいる	
14 学習成果を的確に把握するため、学習評価にも工夫を加えている	
15 実践を振り返り、指導力向上に努めている	
16 地域との関係づくりが積極的にできている	
17 様々な保護者に対応できている	
18 学会発表や論文の公表など、学校教育の発展に資する研究活動ができている	
19 研修などの自己研鑽の機会を活かし、積極的に学んでいる	
20 全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている	

7. その他、教職大学院に対する意見がありましたら、自由にご記入ください。

資料9 修了生調査の調査票（子ども支援・ストマス）

1. 【共通必修科目】（基礎と課題）の成果を、現在、以下のそれぞれの分野において、どの程度活かしていますか？ ※共通必修科目とは、①「教育課程編成の基礎と課題」②「現代的な学力観と授業実践の基礎と課題」③「授業づくりと学級経営の基礎と課題」④「教科等におけるICT利活用の基礎と課題」⑤「子どもの学ぶ意欲の基礎と課題」⑥「生徒指導・学校カウンセリングの基礎と課題」⑦「特別支援教育の基礎と課題」⑧「教育経営の基礎と課題」⑨「地域と連携する学校づくりの基礎と課題」⑩「教職キャリアデザインの基礎と課題」を指します。 「5 十分に活かしている」「4 やや活かしている」「3 どちらとも言えない」「2 あまり活かしていない」「1 全く活かしていない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	教育課程や年間指導計画に関する見通しを持った編成
2	授業における実践的指導力の向上
3	教材開発能力の向上
4	教科等におけるICT利活用能力の向上
5	現代的な学力観や学力育成への対応
6	いじめや不登校問題などの生徒指導・教育相談
7	子どもの特性に応じた多様な教育ニーズへの対応
8	学級経営の実践的指導力の向上
9	学校経営に関する諸問題への対応
10	学校と地域との連携の推進
11	学校と保護者との連携の推進
12	自己のキャリアデザイン
2. 【子ども支援探究コース専門科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？ ※専門科目とは、専門科目とは、①「児童福祉と教育」②「教育相談における見立てと手立て」③「子ども支援活動実践の開発・省察」④「発達障害を持つ子どもの理解と支援」⑤「心身の発達過程論」⑥「個が生きる集団づくりのための生徒指導」を指します。 「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1	不登校やいじめなどに対して、複数の具体的なアプローチを考える力
2	児童生徒の学習意欲や態度について、心理学的な観点からの理解
3	発達障害のある児童生徒に対して、ニーズに応じて教室でできる複数の具体的なアプローチを考える力
4	自殺予防教育やストレスマネジメント教育などの心理教育を具体的に実践する力
5	地域における特別支援教育の相談機関や制度などについての理解
6	児童福祉のあり方、及び児童福祉と教育の関連性や連携のあり方に関する理解
7	生徒指導の機能を活用し、子どもに自己指導能力と社会的リテラシーを育成する力
8	子どもを対象とした知能、パーソナリティ、メンタルヘルスおよび学級集団に関するアセスメント手法を理解し、学校現場で活用できる力
3. 【実習科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？ 「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
(1) 「基盤実習」（1年次）について	
1	教科等指導力
2	児童生徒とのコミュニケーション力
3	特別な配慮を要する児童生徒へのケア
4	学級経営力
(2) 「学校課題探究実習」（2年次）について	
5	教科等指導力
6	児童生徒とのコミュニケーション力
7	特別な配慮を要する児童生徒へのケア
8	学級経営力

4. 【目標設定確認科目】【目標達成確認科目】により、以下に挙げることはどの程度身につきましたか？ 「5 とても身についた」「4 やや身についた」「3 どちらとも言えない」「2 あまり身につかなかった」「1 全く身につかなかった」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
(1) 「教育実践課題研究Ⅰ」（【目標設定確認科目】）（1年次）について	
1 自らの課題を発見・分析する能力	
2 理論研究と、自らの課題を結びつける能力	
3 課題に対する改善策を立案する能力	
4 達成目標を設定し、客観的な資料やデータを収集する能力	
(2) 「教育実践課題研究Ⅱ」（【目標達成確認科目】）（2年次）について	
5 自らの立てたリサーチクエスチョンへの答えを見出す能力	
6 自らの課題に対する改善の実践を、理論と実践の往還を通じて相対化する能力	
7 自己の教育実践を振り返ることができる能力	

5. 教職大学院の【施設・設備】や【学生生活】について、それぞれの満足度を教えてください。 「5 とても満足している」「4 やや満足している」「3 どちらとも言えない」「2 あまり満足していない」「1 全く満足していない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1 各演習室などの学習環境	
2 院生共同研究室などの生活環境	
3 大学図書館および教職大学院図書コーナーに備え付けの資料	
4 教員チームによる学生指導	
5 現職院生やストレートマスターなどの様々な院生との交流	

6. 教職大学院で2年間学んだ成果を、以下のそれぞれの点に、どの程度感じますか？ 「5 とてもそう思う」「4 ややそう思う」「3 どちらとも言えない」「2 あまりそう思わない」「1 全くそう思わない」のどれか1つを選択して、オレンジ色のセルにご回答をお願いします。	
1 社会との関係性の中で、学級や学年のことを考えている	
2 学級や学年を学校の「組織」として見ることができている	
3 物事を円滑に進めるため、見通しを持って計画的に進めることができている	
4 同僚教員との協働関係に気を配ることができている	
5 ベテラン教員に配慮できている	
6 校務分掌で自分の役割を積極的に果たしている	
7 学年集団で自分の役割を積極的に果たしている	
8 学級集団づくりに積極的に取り組んでいる	
9 生徒指導や教育相談等において、専門的知識と実践力を発揮できている	
10 児童・生徒に積極的に関わり、深い理解に努めている	
11 教材研究や事例研究を積極的に行っている	
12 教科・学習指導において、貢献できている	
13 積極的に授業開発に臨んでいる	
14 学習成果を的確に把握するため、学習評価にも工夫を加えている	
15 実践を振り返り、指導力向上に努めている	
16 地域との関係づくりが積極的にできている	
17 様々な保護者に対応できている	
18 学会発表や論文の公表など、学校教育の発展に資する研究活動ができている	
19 研修などの自己研鑽の機会を活かし、積極的に学んでいる	
20 全体的に見て、教職大学院で学んだことをよく活かしている	

7. その他、教職大学院に対する意見がありましたら、自由にご記入ください。